人材育成プログラム… 自立への旅立ち

16,728人が参加しました！

第46回 アカデミックホームステイプログラム

研修企画（順不同）
エフエム大分
佐賀新聞社
長崎新聞社
宮崎日日新聞社
南日本新聞社
琉球新報社

旅行企画
南日本カルチャーセンター

後　　援（順不同）
沖縄米国総領事館/鹿児島県教育委員会/大分県教育委員会/長崎県教育委員会/熊本県教育委員会/沖縄県教育委員会/鹿児島市教育委員会/宮崎市教育委員会/大分市教育委員会/長崎市教育委員会/別府市教育委員会/佐世保市教育委員会/延岡市教育委員会/日向市教育委員会/西都市教育委員会/都城市教育委員会/日南市教育委員会/小林市教育委員会/えびの市教育委員会/串間市教育委員会/宮崎県市町村教育委員会連合会/宮崎県県立学校長協会/宮崎県校長会/宮崎県PTA連合会/宮崎県高等学校PTA連合会/鹿児島県PTA連合会/沖縄県PTA連合会/長崎県PTA連合会/佐賀県PTA連合会/鹿児島県小学校外国語活動・外国語科研究会/鹿児島県中学校教育研究会英語部会/鹿児島県高等学校教育研究会英語部会/長崎県英語教育研究会/大分県中学校英語教育研究会/宮崎県中学校教育研究会英語部会/沖縄県中学校英語教育研究会/沖縄県高等学校英語教育研究会/鹿児島県海外子女教育・国際理解教育研究協議会

次代を担う国際人として

南日本カルチャーセンター
代表取締役社長　濵　田　純　逸

あらゆるものがスピード化され、国際間の文化、経済、教育など相互の交流はますます盛んになり、昨日まで全く関係のなかった遠い外国の人たちと、話し合わなければならないような機会が多くなっており、「地球はひとつ」という言葉が現実となりつつあります。

このような国際情勢の中で、これから活動していくには、世界各国の言葉、生活習慣を理解し、尊重しなければ、真の協調は生まれないと言えましょう。

次の時代の日本を担う青少年のみなさんが、この機会に海外生活を体験し、国際感覚を育成され、世界に雄飛する人に成長されることを祈念してやみません。

プログラム参加者数

県　別	小・中学生	高校生	大学生	合　計
福岡県	63	58	67	188
長崎県	365	171	38	574
佐賀県	808	241	50	1099
大分県	872	433	45	1350
熊本県	1780	907	99	2786
宮崎県	1901	434	95	2430
鹿児島県	4324	1600	234	6158
沖縄県	1086	829	111	2026
その他	76	29	12	117
合　計	11275	4702	751	16728

保護者の皆様へ

今から約45年前、初めてホームステイに参加する生徒たちが、九州各県の駅から出発する時、（当時は、羽田空港まで、九州から国鉄と新幹線を利用して行っておりました。）参加者と保護者が抱き合って、人目をはばかることなく、涙を流しながら別れる光景が、各駅のどこでも見られたものでした。しかし、昨年の出発光景で、泣き別れる生徒と保護者は、どこにもいらっしゃいません。何故、親子が涙ながらに別れていたのが、笑顔で別れるようになったのでしょうか。この変遷の中に、日本のホームステイの価値の変容が凝縮しているといっても過言ではありません。

45年前の涙は、アメリカに行く子も、送り出す親も、未知の世界に旅立つ不安と恐怖の涙だったのです。「ホームステイ」という言葉すら市民権のない時代ですから、1カ月間も、言葉も分からないアメリカ人家庭で、無事過ごしてこられるだろうかという恐ろしさは、想像以上のものでした。周囲にホームステイ参加者は一人としていない、ましてや、初めて海外に行くという生徒とその保護者ばかりですから、みんな真剣に取り組んだものです。事前の英語の学習や自文化学習でも、異文化学習でも、参加者には誠実で、真摯な国際交流に臨む姿勢と意気込みがありました。

ステイ地の市長に表敬訪問に行った際、市長の英語が、ほとんど分からないにもかかわらず、ノートを片手に、一生懸命に記録を取る中学生の姿が、その象徴的なものでした。それが現在においては、説明する市長の英語をかたわらに、市長の椅子に座りながら、右手はピースのポーズでお互いに写真の撮り合いをする、そんな様子を時々目にするようになりました。誰もがホームステイという言葉を使うようになり、ホームステイ参加者が周りに溢れるようになり、着実に、国際交流の輪は広がっているのかもしれません。特に、観光旅行の一形態としてホームステイが実施されるようになって以来、学生時代に一度は、ホームステイや留学で海外に出かけるのは、珍しくもなく、むしろ当然といったような風潮も見られるようになりました。その結果、ホームステイは本来の民間の国際交流や異文化学習の場としての位置から離れ、「学生のための海外旅行」としての要素を内包しつつ、観光旅行化してきております。さらに、ホームステイに気軽に参加できるこの「気軽さ」が、「安易さ」に変化しつつあります。

45年前、保護者は、何故、高額な参加費用を、子どもさんのためにお支払いされたのでしょうか。それは、保護者がホームステイを「異文化学習の場」と理解されていたからにほかなりません。21世紀に生きる子どもたちには、国際感覚と英語力が必要と痛感して、ホームステイの成果に、それらのものを期待していたわけです。すなわち、ホームステイを教育的なものとしてとらえ、「かわいい子には旅をさせよ」という気持ちで、その参加費用を支出されていたのです。だからこそ、出発の時に、涙を流して別れるほどの悲しさがあっても、帰ってくる時の子どもの成長を思えば、送り出すことができたわけです。私どもは今でも、この45年前の出来事の中に、このプログラムの原点を見ることができます。

「何故行くのか？」「ホームステイとは一体何なのか？」「ホストファミリーとは？」「真の相互理解とは？」などの様々な疑問を、参加する側も、ホームステイ主催者側も、もっと真剣に受け止め、考えてみる必要があるのではないでしょうか。「行きたいから行く」「子どもが行きたいというから行かせる」という考えではなく、「生徒はどのような目的で行くのか」「保護者は、どのような目的で行かせるのか」という視点で考え、ホームステイ主催者は、「ホームステイを通して、生徒、学生に何を学ばせ、何を伝えさせるか」という具体的な視点が必要になってくると思います。

ホームステイとは、「文化的戦場」です。異なる文化を持つものが、共同生活をすれば、そこに摩擦や不適応が発生するのは当然です。ですから、参加者は、表面的に外から眺めるだけの観光旅行とは、根本的に異なるものであるという事を知らなければなりません。言葉も違う、他人の家庭に入り、共に生活する事がホームステイなのであり、その方法で異文化を学習するのですから、それは不自由な生活を常態とするものであると考えなければなりません。そして、同時に、彼らからすれば、参加者を通して、日本人を見、日本を知るという事に他なりません。つまり、参加者がアメリカにホームステイに行くという事は、日本人や日本を見せに行くという側面をも有しているのです。

センターでは、真のホームステイとは、参加者にとって「環境に適応しなければならない不自由さ」、「言葉を自由に使えないいらだち」、「日本の家族や両親と会えない孤独感」、「他人の家庭で生活する不安」などの幾多の困難が待ちかまえており、それらの苦難をどのように乗り越えて行くかが、ホームステイの最も価値ある側面であるとの認識を持っております。困難があるからこそ、「かわいい子には旅をさせよ」と言い続けられているのであって、観光旅行やお買い物ツアーに、保護者が金銭的負担を負ってまで、旅をさせる意味などないのではないでしょうか。

参加者には、いつも「学習する姿勢」を求めます。それは、「机上における学習」ではありません。「異なる文化を観察し、異なる価値観を理解し、異なる言語を使う体験学習」です。他人の家庭で過ごす事による「精神的自立」と「社会性」を養う体験学習でもあります。これらのセンターのホームステイ理念を、充分にご理解いただき、その認識の上に立って、ご参加をご検討いただきたいと思います。

参加する皆さんへ

このプログラムは、1974年に始まりました。おそらく、日本全国で行われている数多くのホームステイの中で、最も歴史の長いホームステイプログラムの一つだろうと思います。1974年に大学4年生で参加された先輩は、今年66才になられますし、そして、参加する皆さん方全員が、生まれる前からあったことを考えますと、その歴史を理解できると思います。また、歴史だけでなく、これまで参加されました、皆さん方の先輩は16,728人にも上り、一つのプログラムの参加者数としましても、おそらく、日本有数の、ひょっとしたら、日本で最も参加者数の多いプログラムかもしれません。さらに、このプログラムに参加された先輩方で、その後、高校留学された方、大学留学された方、語学留学された方など、合計すると1,000人を超えており、現在でも、社会的に様々な分野で活躍され、このプログラムをきっかけとして大きく人生や進路が変わったという方々が、たくさんいらっしゃいます。(詳細は、センターホームページの「ホームステイの実態調査」を参照してください。) 皆さんは、現在、ただ単に、ホームステイに参加してみようと思っているかもしれませんが、先輩達の言葉を借りれば、「人生を変えた夏」ということになりますので、ホームステイを実りあるものにするため、申し込まれる前に、しばらく、次のようなことなどを考えてみてください。

このホームステイは、観光旅行ではありません。「体験学習」であり、「人材育成」プログラムです。遊び気分で参加したり、海外旅行に行くような気持ちで、楽しさばかりを期待して、参加しようとしているのであれば、このプログラムは決して満足できるものではないと思います。なぜなら、このホームステイは、生活体験や文化交流による「異文化学習」が、その大きな目的であり、日本の家族を離れ、異なる環境の中で、一人で生活することによる「自立」もまた、目的の一つとしています。ですから、観光をしたり、買物をしたり、いろんなところに遊びに行ったりすることを目的とはしていません。

異国で、異文化の中、英語という道具を使って、他人の家庭で生活することを考えてみてください。おそらく、いろんな出会いがあると思います。いろんな文化の違いも発見できると思います。戸惑いや驚き、動揺も感じるでしょう。いろんな楽しさも体験できるかもしれません。でも、ホームシックのような寂しさも体験すると思います。おそらく嫌なこともたくさん起こると思います。悲しいこと、涙を流したくなるようなこともあるでしょう。そして、ホストファミリーとの苦しくなるほどの別れの悲しみと感動も、このプログラムで体験することの一つだと思います。センターでは、皆さん方の体験する、これら一つ一つの、すべての体験が、学習であると考えています。

いつも「学ぶ」姿勢を持ってください。「何のために、ホームステイに参加するのか」「ホストファミリーに、何を伝えるのか」「自分は、ホームステイで、何を勉強するのか」などという気持ちを決して絶やさないでください。皆さんが体験する出会いも、出来事も、感情も、感動も、参加者によってみんな異なります。各自が自分の体験から、何を学ぶかは異なってきます。そして、自ら考え、自ら学ぶ姿勢がなければ、体験を通して学ぶ価値が半減してしまいます。すなわち、体験という名に値するほどの「価値」を、そこから学習することなく、単なる感情の高ぶりや感想だけで、終わってしまうことになります。これまでの参加者が帰国した後、すなわち異文化体験をした参加者が、自国に帰って、どのような影響を受けていったかを考えてみれば、ある程度、その謎を解くことができます。帰国後の参加者たちは大きく二通りに分けることができます。一つは帰国時に大きく膨らんだ異文化体験の刺激と興奮が、時間の経過とともに萎んで、後には「楽しい思い出」と「また行きたい」という思いが、漠然とした英語や留学に対する「夢」として残るだけのケースです。もう一つは異文化体験の刺激と興奮が、自分の人生に生きがいや目標を与え、日本での生活に前向きに作用し、これまでには見られなかったほどエネルギッシュで、積極的な言動が生み出されているケースです。センターが参加者に望むのは、二番目のケースに参加者全員がなってもらうことです。

英語が自由に使えない皆さんが学ぶためには、言葉を使うよりも、積極的に、自ら進んで、挑戦、トライするしか方法はありません。体験しながら、学び、考え、反復、修正しながら、身をもって実践、学習していくわけです。この「積極的に、いつでも学ぶことに前向きな姿勢」が、プログラム期間中に最も望まれることなのです。

そして、英語の学習も大切です。センターでは、出発までに皆さんが英語の自主学習をできるように、アメリカの家庭生活で必要とされる、日常英会話文を238文選定したものを配布しています。参加者は、その会話文を暗記しなければなりません。また、5月末から7月にかけて各1回、オリエンテーション（事前研修会）を開催し、生活習慣の違い、考え方の相違、比較文化、公共道徳やマナー、危機管理やケーススタディなどを勉強してもらいます。これらの学習を積んでこそ、価値のあるプログラムにつながっていきます。ただ参加するのではなく、事前に多くの学習をして、常に学ぶ姿勢を持って参加して欲しいと思います。

このプログラムの特色

◎ 国際理解の学習の仕方を具体的に指導する

ホームステイに参加するだけで、国際理解学習ができると考えるのは、保護者の皆様を始め、学校の先生方、また、数多くの参加者達が考える最大の誤りです。しかしながら、現在でもホームステイに参加しさえすれば、国際色豊かな体験ができるものと、誤解され続けております。ただ漫然と、ホームステイに参加しても、参加者は言葉も理解できない中で、ホストファミリー宅の生活では時間を持て余し、結局は、自分の部屋で過ごすことが多くなり、日記を書いたり、日本に手紙を書いたり、日本の宿題に追われたりする現実が数多くあります。そして、グループの友達や一緒にいる日本人の仲間と過ごすことに喜びを感じます。もちろん、これは日本から留学する多くの学生や社会人の場合でも同様ではあります。センターは国際理解教育の専門業者として、このことは声を大にして申し上げたいと思います。実際に異文化学習や国際理解学習をするためには、事前にその方法の指導を受け、現場であるホストファミリー宅や学校、また訪問先や研修の場において、それを具体的に実践しなければなりません。センターは、オリエンテーションにおいてその異文化体験学習方法まで指導します。

◎ 期間中、両性のセンター職員が常駐し、問題解決にあたる

ホームステイでは、大なり小なり、必ず、トラブルが発生します。この際、これらのトラブルは引率指導者や現地スタッフ任せではありません。日本のセンター職員が現地に常駐しており、職員も問題解決にあたります。すなわち、日本の主催者が直接問題解決に協力します。特に、参加者が男子であっても、女子であっても、気軽に相談できるように、センター職員は両性の職員が派遣されます。

◎ 期間中の様子は、センターのホームページで公開している

期間中、現地での活動内容を、センターのホームページ上で公開しております。内容は、参加者や現地の先生、引率指導者の現地での生活の様子が分かる写真や動画、日記形式の活動報告を中心として、グループごとにアクセスできるようにしています。アドレスは www.mncc.jpです。

◎ 目的は異文化理解と自立に基づく人材育成

このプログラムの目的は、異文化理解と自立に基づく人材育成です。国際交流は手段であると考えており、目的ではありません。日本を離れ、家族と別れ、異言語下の他人の家庭で生活しながら、自己を見つめ、異文化と自文化を考えるためのプログラムです。

◎ 午前9時から午後4時までスケジュールが組まれている

このプログラムは、午前9時から午後4時までスケジュールが組まれております。授業、社会見学、文化交換会、レクリエーション、終日研修と、アメリカの生活を様々な方面から体験できるようになっています。

◎ オリエンテーション（事前研修会）が充実している

このようなプログラムで最も大切な事は、説明会やオリエンテーションが、どの程度の時間と内容で行われているかということです。このプログラムでは、約3時間かけて説明会が行われています。また、6月と7月の週末に、合計約15時間のオリエンテーションが組まれています。

◎ ホストファミリーはボランティアによる受入れ

一般的に、ホストファミリーには、日本の下宿と同様、お金をお支払いするものと、ボランティアによる場合の2通りがありますが、このホームステイは基本的にボランティアによるファミリーによって成り立っているプログラムです。但し、受入れのために余分に発生する費用の補助が行われることもあります。

◎ ボランティア活動への参加

期間中、ボランティア活動が計画されています。アメリカを理解する上での重要なキーとなる「ボランティア」を、実際に主体者として自ら体験することによって、ボランティアの真の意味を考えます。

◎ 危機管理の指導を行う

センターでは、異文化の生活を「文化的戦場」として捉えています。すなわち、ホームステイは「文化的戦場」に赴くことであり、異なることを常態と考えます。そのため、参加者への指導の一つに「危機管理」があります。この危機管理のあり方は、センターが独自に作成したものに基づいて、オリエンテーションで行います。

◎ 教育的なプログラムである

決して観光旅行ではありません。参加者は出発までに課題英会話文を利用して学習できます。また、現地での授業は生徒のレベルにあわせて2クラスに分けて行われます。そして、宿題などもホストファミリーと一緒にやるようなものが毎日出されます。

ホームステイを成功させるために

1　ホームステイの成功とは何か ── 参加者が負う責任

「ホームステイの成功とは何か」というテーマは、参加者だけでなく、その保護者の方々にも、事前に、ぜひ考えていただきたいことの一つです。なぜなら、その理念が、ある程度、具体的に明確にされていなければ、また、示されていなければ、プログラムの終了後、その体験が参加者の人生にも活かされることなく、ホームステイが単なる「良い思い出」だけで終わってしまうかもしれないからです。当然、参加者によってこの答えは異なってまいりますが、この設問を多くの参加者や保護者に尋ねれば、大体、次のような考えに要約することができます。すなわち、参加者がホストファミリーとの交流を深め、親密な関係を築き上げ、異文化を学び、英語力を伸ばして、国際感覚を身につけて帰国できたら、それが成功と呼べる、理想的な体験学習のようです。

確かに、要約されたこれらの考えは、ホームステイの持つ成果を集約しているものではあります。しかし、残念なことに、この考えは参加者側から見られたものであり、受入れ側の視点が全く欠落しております。

ホームステイは、ホテル滞在とは異なり、宿泊先はホストファミリー宅ということになります。ホテルに宿泊する時のホテル側の目的は、「金銭による対価」になりますが、ホームステイにおけるホストファミリーの目的とは、何なのでしょうか。特に、センターのホストファミリーは、原則として「ボランティア活動」の一環として、参加者の受入れを行います。ということは、ホストファミリーは、何の目的で、参加者のお世話をされるのでしょうか。

つまり、ホームステイには、参加する側と受入れ側の趣旨と目的という、二面性があります。参加する側が目的を持っているように、受入れ側も目的を持っているということです。ですから、参加者がいかに自分の目的が達成され、プログラムに参加して本当に良かったという感想を持っていたとしても、その参加者の受入れ側である、「ホストファミリー」「プログラム関係者」が、果たして参加者と同様の評価を行ってくれるかという問題があるのです。つまり、参加者側の目的が成就したとしても、それではまだ50％の目的達成であって、受入れ側の目的が達成されて、初めて100％のホームステイの成功という言葉が出てくるのです。

ホストファミリーの目的は、「参加者を自宅に受け入れて、体験的に日本人の考え方や文化を理解する。」というところにあります。その目的のために、皆さんを自宅で受け入れるのです。では、彼らの目的達成のために、何が必要であるかを考えてみてください。そうすると、それは参加者の協力なくしては不可能だということがわかります。いくら彼らが努力しても、受け入れた生徒が、内気で、消極的で、恥ずかしがり屋で、日本の文化や習慣、日本人の考え方などについて話そうとしなければ、また、紹介する姿勢がなければ、彼らの目的が達成することはありえません。すべては、受け入れる生徒の姿勢と行動次第という受身の立場であることがわかります。つまり、参加者にこれらの姿勢が欠落していたら、自分たちのボランティア活動によって得られる達成感というものは半減してしまうのです。ホームステイが単なる観光旅行ではないという一つの理由がここにあります。ホームステイは、ギブアンドテイクであり、ホストファミリーに対して参加者が負う責任というものがあるということです。それは二つあります。一つは、いつも日本の紹介を行おうとする姿勢と実践です。もう一つは、異なることを受け入れようとする姿勢とホストファミリーに対する感謝です。もし、あなたがホームステイに参加しようとしているなら、これを実践することができますか。このプログラムでは、それが問われます。

2　ホームステイを成功させるために

①　オリエンテーションの指導を実行すること

センターではオリエンテーション（事前研修会）を2回、合計約15時間実施します。1回目は保護者同伴で、ホームステイ全般にわたる指導を行い、2回目は参加者だけを対象として、グループ活動上の指導とケーススタディを行います。この席上で、徹底した異文化学習の指導と自文化紹介のための方法と、そして、ホームステイにおける学習の仕方や危機管理などを行います。このオリエンテーションの内容を忠実に実行すれば、成果の多い異文化学習が体験できます。なお、参加者が九州以外に居住している場合は、録音ＣＤ等で対応します。

②　できるだけ英語の勉強をしておくこと

センターでは、申し込まれた方々に暗記用の英会話文が238文ほど掲載されたガイドブックをお渡ししております。ホームステイ期間中に必ず一度は使うという重要な英文ばかりですから、出発までにこれらの英文を覚えておくと便利です。毎年、英語の勉強をしていない小学生が参加しますが、彼らもこの英文を覚えて参加することによって、十分にホストファミリーとの生活を楽しんでいます。ホームステイに参加するからといって特別に英会話学校に行く必要はありません。この238の暗記用英文（ホームステイイングリッシュ）を全部覚えてしまえばいいのです。そのためには、早く申し込む必要があります。

③ 早くから準備すること

このプログラムは観光旅行ではありません。立派な民間外交の役割を果たしています。ホテルではなく、一般の家庭で生活するのですから、ファミリーは皆さんを日本人の代表としての眼で見るのです。ですから事前の準備は大変重要です。早く申し込む必要性は前述の通りですが、英語だけではなく、文化や生活習慣の違い、その国についてなども知っておく必要があります。また同様に、日本のことについても学んでおく必要があります。これらの事は、参加する皆さんが観光ではなく、勉強する目的で行くのだという心構えを持つ意味でも大事なのです。

④ 積極的にトライすること

ホームステイ期間中は、受身の立場で生活してはいけません。受身の生活は観光旅行を意味するものです。他人がしてくれるのを待つのではなく、主体的に生活してください。「～される」のを待つのではなく、「自ら進んでトライする」という気持ちを常に忘れないでください。遠慮してはいけません。引込み思案ではいけません。初めての体験でも、恐れず自主的にやってください。トライする数が増えれば増えるほど、皆さんが体験する数も多くなり、得るものも多くなります。反対に遠慮すればするほど、アメリカでの生活は思い出の少ないものになってしまいます。このプログラムをより有意義なものとするためには、皆さんの積極的なトライなくしては考えられないのです。「考える前にトライすること」、これを実践してください。

⑤ 目的を持つこと

はっきりとした目的意識を持つことは、大変重要です。漫然と参加するのではなく、期間中に必ず成し遂げられるような、目的意識を持つことをお勧めします。例えば、「英語力をつける」という漠然としたものではなく、「毎日一つ新しい英語表現を覚える」というような具体的目標が大切です。また、学習的な目標より、自分の趣味や特技を生かした目標の方が、効果的です。サッカーの好きな人は、サッカーに関する目標を、手芸が趣味の人は、手芸に関する目標を、ハンバーガーの好きな人は、ハンバーガーに関する目標を立てた方が、実践できる可能性が高くなります。期間中に、必ず成し遂げられるような、実感があるものを目的としてください。

⑥ ギブアンドテイクの精神を持つ

先述したように、このホームステイは、基本的にボランティアによるホストファミリーの受入れによって成り立っております。ですから、参加者側と受入れ側の関係は「Give & Take（ギブアンドテイク）の精神」によって成立します。これは、「一人だけが得るのではなく、両者が得たり、与えたりする」精神を意味しています。つまり、参加者はホストファミリーから、「家庭生活の場」を提供されているのですから、ホストファミリーに対して、常に「ギブ(Give)」する気持ち、すなわち、「自分は何をホストファミリーのためにしてあげられるか」という視点が必要です。この気持ちがある限り、ホストファミリーとの生活はうまく行くはずです。

⑦ 参加者の自立と親の自立

参加者は、長期間にわたり、日本を離れ、日本の親元を離れ、米国文化の他人の家庭で、英語を使って生活していかなければなりません。悲しくても、寂しくても、悩みがあっても、ホストファミリーの家には、日本語で相談できる人は誰もいません。孤独な生活環境でも、一人でそれを乗り越えていかなければなりません。このプログラムの最も大事なことは、これらの環境の中、一人でやっていくことなのです。そのためには、お申込みいただいてから後も、ご自宅では、自分のことは自分でやっていくという、「自立」した環境で生活されることをお勧めします。保護者の方も同じです。子離れできない保護者のお子様は、一般的に、親離れできないお子様でもあります。このプログラムを良い機会にして、ぜひ、相互依存の関係から脱却していただきたいと思います。

⑧ 「はい」「いいえ」の自己主張

明確に、自分の意思表示ができることは、アメリカ社会の基本です。日本の生活に「はい」か「いいえ」の判断を導入することを、強くお勧めします。日本でできなければ、ホストファミリー宅でも絶対にできません。自分の気持ちを「説明」するのではなく、「はい」「いいえ」、「賛成」「反対」、「正しい」「間違い」などの、明確な判断が必要です。普段の日常生活の中に、自分で判断し、それを意思表示し、その結果責任を自分で負うという環境を持ち込まない限り、いつまでたってもできるようにはなりません。アメリカで家庭生活を送るための、必要最小限の準備の一つです。

募　集　内　容

研修目的

小学生、中学生、高校生、大学生を対象として、アメリカの家庭で家族の一員として過ごし、市民生活と学校生活の両面を体験しながら、言葉と心のふれあいにより、幅広い視野、国際感覚、語学力、そして自立心の向上を図ろうというものです。

研修参加資格

◇日本国籍を有する小学生（5年生以上）、中学生、高校生、大学生に限る

◇心身健康で、自分の身の回りのことを一人でできること（※詳細は、P17のQ13をご参照ください。）

◇異文化や英語に関心があり、積極的な意欲のあること

◇参加者、保護者とも配布された資料を理解し、センターの指示・決定事項を遵守できること

◇参加者、保護者ともプログラムの趣旨を理解していること

◇オリエンテーションに参加すること

※出発前に上記研修参加資格に抵触すると判断された場合、センターでは参加をお断りさせていただく場合があります。

※何らかの持病や症状のある方は、申し込まれる前に、必ずセンターへご相談ください。

研修期間

【中/高/大コース】2019年7月下旬から24日間

【小学生コース】2019年7月下旬から15日間

※日程が合わない場合でも、個人ベースで対応できる場合がありますので、お問い合わせください。

研修費用と定員

コース	定員	研修費用
中・高・大 24日間	300人	508,000円（九州の空港発着）※ 528,000円（那覇空港発着）
小学生 15日間	30人	488,000円（九州の空港発着）※ 508,000円（那覇空港発着）

※福岡、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島空港からの発着料金です。その他、同一料金で参加できる空港がありますので、お問い合わせください。

滞在地

アメリカ合衆国（西海岸を中心として、中西部までに亘る選定された地域）

申込締切日

2019年5月21日（但し、定員になり次第締め切ります。）

利用航空会社

日本航空、アメリカン航空、全日空、ユナイテッド航空
大韓航空、デルタ航空、エバー航空、中華航空
アシアナ航空、エアカナダ

研修費用の範囲

◇研修費用に含まれるもの

1．発着地から米国までの往復航空運賃エコノミークラス
2．米国到着後、ステイ地までの交通費及び帰りの空港までの交通費
3．期間中の授業料、及び研修教材費
4．期間中の午後に計画されたプログラムの交通費、施設使用料
5．終日研修における交通費、入場料見学費
6．米国受入機関の運営費用
7．現地準備期間（3月～7月）の諸費用
8．米国内における団体行動中の費用
9．米国での現地教師（ティーチャーコーディネーター）の期間中の人件費
10．オリエンテーション、異文化体験報告会費用
11．往復の旅程中に発生する宿泊費用（食事代を除く）
12．集合から解散までに発生する団体行動中の交通費
13．引率指導者同行必要経費
14．センター職員同行必要経費

※家庭内での食事は、ホストファミリーの好意で提供されます。

◇研修費用に含まれないもの

1．米国税関申告書作成、携帯品・別送品申告書作成料、電子渡航認証システム（ESTA)代理申告手数料や有効性確認などの費用 9,000円
2．ESTA申請料　1,800円（有効なESTAの所有が確認された場合は必要ありません）
3．パスポート印紙代……所持者は不要
(5年間有効なパスポート印紙代
12才以上-11,000円、12才未満-6,000円
10年間有効なパスポート印紙代16,000円)
4．米国の出入国通行税、入国審査料、税関審査料、検疫使用料、米国保安料、空港施設使用料　約8,000円
5．国内外の空港施設使用料や旅客保安サービス料、国際観光旅客税、航空保険特別料金、空港税など　　約5,000円
6．燃油サーチャージ料
(目安：28,000円／2019年1月10日現在)
7．任意の海外旅行保険料
8．個人的な小遣い
9．超過航空受託手荷物料金

※天候などの当社の関与し得ない事由のため、当初のスケジュールと異なり、ホテルに宿泊をしなければならない場合は、宿泊費や食費が別途必要になります。

※燃油サーチャージ料は、燃油原価の高騰に伴い、航空会社が国土交通省に申請し認可されたもので、航空運賃とは異なる付加的な運賃であり、区間によって異なります。一時的なものとして実施されており、区間や航空会社によって料金も流動的です。

研修管理

添乗員は同行しませんが、引率指導者（プログラムアドバイザー）が国際線出発空港から同行します。期間中は、センター米国事務所内に、センター職員が常駐し、引率指導者と連絡を取り合いながら、適切なスケジュールや活動内容の実施、運営に関する管理、監督を行います。

ホームステイ地の決定

このプログラムの目的は、異文化を実感し、心のふれあいを育てることにあります。そのため、この目的にふさわしい環境の地区を郊外に選定してあります。ホームステイ地は、西海岸を中心として、中西部までに亘る地域で選定されますが、原則として、みなさんの滞在地の選定、及び決定は、性別、学年、県別などの様々な要素を考慮してセンターが行います。

ホストファミリー

ホストファミリーは、各ホームステイ地区のコーディネーターを通じて、日本に関心を持ち、異文化について興味のある家庭の方々に依頼します。ホストファミリーは基本的にボランティアで、皆さんを受入れてくださいます。この善意に応えるように責任ある行動をしてください。特に注意して欲しいことは、お客様という気持ちを捨て、自分でできることは自分でやり、お手伝いなどをしてあげることです。このような気持ちで生活することが、ホストファミリーとの絆をより強めるわけです。なお、ホームステイは原則として一家庭に1人、または2人で滞在します。また、2家庭から受け入れを希望された場合は、前半と後半にわかれて、2家庭に滞在する場合もあります。（詳細は11ページを参照）

ホストファミリーの決まるまで

正式に参加申込みをされますと、センターから正式書類が送られてきます。その中には「ホストファミリーへの手紙」や「ホームステイ申込書」「スナップ写真」など、あなたをできるだけ詳しく紹介するための提出書類があります。これらのものをセンターからアメリカへ送り、各ホストファミリーは、その中から、最も自分の家庭にあった人を選んでいきます。例えば、趣味が一緒だとか、お父さんの職業が同じだとか、そのようないろんな理由で、各ホストファミリーが、どの生徒を自分の家庭でお世話するか決定していきます。ホストファミリーには、2人の生徒を受け入れることを希望している方もいれば、生徒1人の受け入れを希望する方もいます。

移動手段について

家庭生活を中心とした時間帯においては、ホストファミリー宅の家族の一員として生活しますので、家族とともに外出する際は、必然的に、ホストファミリーが運転する車に同乗する機会が多くなります。毎日の学校への登下校においても、ホストファミリーの送り迎えのお世話になりますし、午後の活動に伴う研修地までの移動も、ホストファミリーの善意によるカープール（相乗り）に依存することになります。さらに、現地の先生方の運転する車に同乗することも常態化するでしょう。幸いにも、過去40年以上に亘り重大事故等は発生しておりませんが、これらの事実は実績となり得ても、将来の安全を保証するものではありません。肝要なのは、研修生自らが、シートベルトの装着等の危機管理を心がけ、傷害保険に加入するなどして、自分でできる対策は積極的にしておくことが、ホームステイや海外で過ごす際のあるべき姿です。

為替変動による研修費用の変更について

このプログラムは、2019年1月10日時点の運賃、料金を基準として、研修費用の算出が行われています。研修費用は、航空運賃の改定や円ドル相場の変動に伴い、その変更が起こることがあります。「その他のプログラム条件」で明記されていますように、航空運賃の大幅な改定があった場合は、その増額、減額分が研修費用に反映されます。また、円の対ドル為替は変動相場制ですので、その価格変動は常に起きておりますが、それを反映させることは現実的ではありません。そこで、このプログラムにおきましては、2019年6月20日の円対ドル為替相場のTTSレートを基準値とし、その日のレートが130.00円以上の場合や、90.00円以下の場合は、研修費用を検討し、参加費用の増額、もしくは減額を行う場合があります。

英語力について

ほとんどの日本人の方々は、小学生と大学生の英語力は、かなり違うと考えています。小学生は学校で英語をあまり勉強したことがないし、大学生は、既に、中学校、高校で6年間も英語を学習しているのだから、相当な英語力の差があると考えるのは、当然のことかもしれません。例えば、ホームステイに参加した小学生と大学生において、本当にそれだけの差を、ホームステイの現場で見ることができるでしょうか。答えは「No」です。ホームステイでの両者の英語力は、ほとんど変わらないのです。何故でしょうか。

言葉を自由に駆使するためには、「書く」「読む」「話す」「聞く」という4つの能力が必要です。4つの能力のうち、ホームステイ期間中に最も必要なものは、「話す」「聞く」という能力です。ところが、高校生、大学生は、「書く」「読む」という能力はあっても、「話す」「聞く」という能力は、ほとんどありません。「話す」「聞く」という学習は、6年間の英語学習ではほとんどやっていないからです。小学生も、中学生も、高校生も、大学生も、ホームステイにおいては、「話せない」「言っていることがわからない」という状態であり、「話す」「聞く」という方法では、コミュニケーションできないという状態です。ですから、小学生、中学生、高校生、大学生のホームステイでの実際的な会話能力は、ほとんど同じだということです。

研　修　内　容

研修内容

原則として、1グループを約25人の参加者と日本人引率指導者1人で編成し、このグループ単位で行動します。参加者は指定されたステイ地区で、それぞれのホストファミリーに引きとられ、ホームステイします。ホームステイ期間中は、午前中は授業を受け、午後からはあらゆる活動が準備されています。また、期間中3回（小学生コースは2回）は終日研修があります。週末は、ホストファミリーと、それぞれの家庭で自由時間を過ごします。

ウェルカムパーティー

アメリカ到着後、一両日中に行われるのがウェルカムパーティーです。これはホストファミリーと現地教師であるティーチャーコーディネーターの先生方が中心となって行う、参加者を歓迎するパーティーです。それぞれのホストファミリーが、食べ物を持ち寄るポットラックという形式で行われ、ゲームなどをして、お互いの親睦を深めます。

授　　業

終日研修日以外の平日は午前中、9時から12時まで3時間、アカデミックセンターで、米国人教師による英語での授業が行われます。カリキュラムはテキストを使い、アメリカの文化や生活習慣・市民生活などについて学び、毎日宿題が出されます。この授業で学んだことが、帰宅後の生活にすぐ利用できるように計画されています。

社会見学と文化交換会とレクリエーション

毎週、午後（13時～16時）は、社会見学や文化交換会、及び、レクリエーションがあります。社会見学は、授業の一部で、ホームステイ地区の様々な職業の人と接し、アメリカの社会生活について学ぶ絶好の機会となります。午前の授業の中でも、この訪問先が事前に説明され、参加者側からの質問にも応じてくれます。また、ホストファミリーや子供達、地域住民の方々と、日本とアメリカについて互いに学ぶ、文化交換会を開きます。その他、老人ホームや学校などを訪問し、交流を行う様々な活動も計画されます。レクリエーションでは、水泳やバスケットボールなどのスポーツや、ピクニックなどを行います。

ボランティア活動

ホストファミリーや、地域の人々に対して、ボランティア活動を行い、寄付金（Donation）を募り、その基金で、アメリカの子どもたちを日本に招待するジャパンホームステイという活動（※詳細は10ページ参照）を行っています。主なボランティア活動内容は、カーウォッシュ（車洗い）と、ガレージセールです。ガレージセールでは、不要な物や手作りの小物などを持っていきます。

終日研修

期間中3回（小学生コースは2回）は終日の研修に出かけます。これも授業の一部ですが、社会見学よりさらに遠い所へ行きます。目的地は、歴史的な場所や建造物、及び自然公園などです。

週　末

土曜日と日曜日の週末は、グループとしての活動はありません。ですから、ホストファミリーと一緒に過ごすことになります。あるファミリーは、この期間を利用してキャンプに出かけるかもしれませんし、あるファミリーはショッピングに行くかもわかりません。また、どこにも出かけず、自宅でゆっくりと休日を過ごすファミリーも数多く見られます。できるだけ、ホストファミリーと行動を共にして、彼らとより親密なつきあいをし、英語や異文化の学習をした方が有意義でしょう。

引率指導者

引率指導者はプログラムアドバイザー（PA）と呼ばれ、グループのリーダーとして、日本を出発し、日本に帰国するまで、参加者の指導にあたります。現地でも参加者と同じホームステイ地に滞在しており、基本的に、グループの全スケジュールに同行します。主な役目は、参加者の生徒指導であり、カウンセラーであり、プログラム助言者です。決して、参加者の通訳ではありません。

現地教師

原則として、現地では1グループに2人の米国人教師（ティーチャーコーディネーター、TC）がつき、参加者のお世話をします。午前中は授業を行い、午後の活動や終日研修、ホストファミリーのことでも、スケジュールのことでも、プログラムに関するあらゆることに、この先生が、引率指導者同様、参加者のために相談にのってくれます。

南日本カルチャーセンター職員

プログラム期間中は、日本の本社から職員が数名派遣され、南日本カルチャーセンター米国事務所に常駐します。そして、グループの日々の活動状況を収集し、管理、運営を行っています。また、引率指導者と連絡をとりながら、相談やアドバイスを行います。（詳細は15ページを参照）

サヨナラパーティー

参加者の皆さんが中心となり、ホストファミリーへの感謝の意味をこめて、ホームステイ終盤の夕刻に行われるものです。日本料理を作ったり、歌や踊り、日本の伝統的文化を発表したり、参加者それぞれの趣向とアイデアで、お世話になったホストファミリーや先生をもてなします。

修了証書

プログラムが終わったら、各先生方の署名入り修了証書が、ひとりひとりに渡されます。

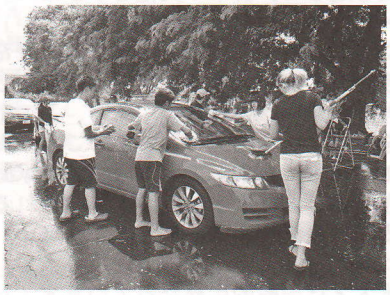
1週間のスケジュール

TIME / DAY	9：00AM	12：00PM	1:00PM	4:00PM
月	アカデミックセンターで授業	昼食	社会見学	帰宅
火			文化交換会	
水	終日研修			
木	アカデミックセンターで授業	昼食	レクリエーション	
金			ボランティア活動	
土	週末は授業はなく、ホストファミリーと過ごします。			
日				

※昼食は、ほとんどがサンドウィッチなどのお弁当です。

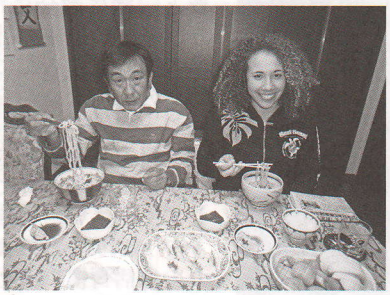
ボランティア活動

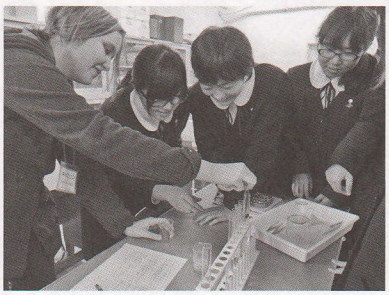
プログラム期間中は、午後の活動としてボランティア活動がスケジュールに組み込まれています。決して受け身の姿勢ではなく、生徒自らが能動的に活動できるという点でも、大変意義のある活動です。なぜなら、ホームステイプログラムに参加する上で、参加者自身が主体的に考え、行動することが、プログラムを成功させるために必要不可欠であり、非常に大切な鍵となるからです。プログラムに参加することで全てが完結しているのではなく、プログラム自体は土台であり、始まりであり、プログラム開始後、参加者自身が主体的に活動することで、その土台はより膨らみ、成長し、充実したものになっていきます。生徒たちが取り組むボランティア活動には、老人ホームを訪問し、施設の方々に日本文化を紹介したり、教会の掃除を行うなどの活動があります。また、期間中に1回、各ステイ地域で、Car Wash（車洗い）やGarage Sale（ガレージセール）などのボランティア活動を行い、寄付金（Donation）を募ります。Car Washでは、参加者たちが自ら看板を作り、呼び込みをし、車の洗車を行います。また、お客として来られたアメリカ人の方々に、この活動の目的を説明するのも参加者が行います。Garage Saleは、日本から不要な物や手作りの物を持って行き、アメリカ人の方々にそれらを販売します。値段をつけるのも参加者であり、商品の説明や値段交渉も参加者自らが行います。これらの活動で得た寄付金で基金を設立し、アメリカの子どもたちを、日本に招待するという奨学制度「ジャパンホームステイ」の骨子が生まれました。特筆すべきは、この原資のほとんどが、日本人生徒のボランティア活動によって支えられているということです。さらに、これまでの参加者たちが帰国した後、使い残したお小遣いなどが寄付されたり、参加者の保護者による寄付なども始まり、それらの活動によって基金の原資が膨らんでいくようになりました。長期間にわたり、このプログラムを支えてきた最大の貢献者は、ホストファミリーであり、彼らの善意なくして参加者の感動はありえません。ホームステイで必要なものは「Give & Take」の精神です。この精神が国際交流を支えているわけです。参加者は、「ホストファミリーに何かを期待する前に、彼らのために何をしてあげられるかという姿勢をもつこと」が大切であり、その姿勢を実践するものの一つが、これらのボランティア活動なのです。



MNCCジャパンホームステイ

上記の基金を活用し、2000年以降8回にわたり、18名のアメリカ人奨学生が日本に招待されました。エッセイや動画等の書類審査によって選考された奨学生たちは、日本人のホストファミリーと約2週間の生活を共にし、日本での家庭生活や学校生活を体験します。奨学生たちが、これらの経験を通して、日本の文化や習慣、そして日本人に関する理解をさらに深めることがこの制度の目的です。期間中、奨学生は、主に地域の中学校や高校に通い、クラスメイトとして日本の生徒たちと一緒に学校生活を体験します、先生という立場ではなく、同級生という立場の同年代のアメリカ人奨学生の存在が、日本人生徒にとっても、知的刺激や意欲につながり、異文化を学習する良い機会になることを強く願っています。日本の生徒が学生のボランティア活動によって実現する、相互交流としてのこの制度は、極めて意義深いものがあります。センターのホームページ上（www.mncc.jp）で、このジャパンホームステイに関する内容も公開しておりますので、ご覧ください。また、日本のホストファミリーも随時募集しておりますし、この趣旨にご賛同くださる方からの寄付も受け付けております。





ホストファミリー

このプログラムの参加者は、一般のアメリカ人家庭（ホストファミリー）に滞在し、家族の一員として生活を共にします。ホストファミリーは、基本的にボランティアによるプログラム参加であり、プログラムの趣旨にご賛同いただいた方々であり、現地の地区担当者（ティーチャーコーディネーター）を通して、決定されています。「自由と平等」が合衆国憲法で保障されているアメリカにおいては、ボランティアであるということを除けば、ホストファミリーの決定に、家族の経済力、家族構成、婚姻形態、年齢、人種、民族、宗教などのプライベートな要素は、法律に抵触するために考慮されません。最も重視されることは、彼らがいかにこのプログラムの趣旨を理解し、熱意と情熱と愛情を持って、参加者を受入れようとする姿勢が、あるかということです。

ですから、実際にお世話されるホストファミリーは様々です。定年退職された子供さんのいない老夫婦の家庭があれば、ご夫婦と子供さんが11人もいるような大家族もあるでしょうし、母子家庭や、父子家庭もあれば、ご夫婦と幼い子供のいる家庭、さらには、ご夫婦と小さな子供がいて、さらにお母さんは妊娠数カ月というような事例も過去何回かありました。いずれの場合も、地区担当者が、ホストファミリーとして適切であると判断した上での決定です。例えば、日本で外国からの中学生を受入れるホストファミリーを想定した時、上記の例のような家庭で、ホストファミリーとして受入れを行うということは、あまり考えられないようなことかもしれません。中学生を受入れるのだから、中学生のいる家庭がお世話することが好ましいかもしれないと、相手側のことを考え、遠慮がちに、「私どもは70過ぎた子供のいない老夫婦ではありますが、もし、どなたもホストされる方がいらっしゃらなかったら、いつでもお世話いたしましょう。」というようなお申し出をされるのが常です。それが日本的な考え方であり、日本の文化であり、日本のやり方であり、日本の価値なのです。そして、同様に、アメリカにはアメリカのそれらがあるのです。ですから、日本の常識では考えられないようなことも、異文化であるアメリカでは、価値観の相違から、充分に起こり得ることです。

何故、ボランティアで、全く見ず知らずの外国の生徒を、お世話されるのか、日本人にとっては大変不思議です。アメリカ社会ではボランティア活動を通して、何か社会に貢献しようとする精神があります。ホストファミリーになることもその表れの一つだといえます。実際のホストファミリーに、それらの質問をすれば、次の様な答えが返ってきます。「留学生を通して、日本の文化を学びたい」とか、「自分の子供達に、国際的な感覚を身につけさせたい」「外国人留学生に、アメリカの家庭を学ぶ機会を与えたい」などが一般的に数多く聞かれる意見です。でも、これらの理由の前に、物事を気楽に、楽観的に、挑戦的に考える、好奇心の旺盛な動的国民性がその背景にあります。日本人の用意周到で、真面目に、悲観的に、慎重に考え、結果的に何もしない静的国民性と全く正反対です。ですから、彼らの行動や考え方には、日本人に理解し難いことが数多くあり、このボランティアにしてもその一つといえます。けれども、お互いにほぼ正反対の考え方を持っている国民であるからこそ、お互いの考え方から大いに学べるという、補完的な存在でもあるといえます。

ですから、日本とアメリカでは、家庭における考え方にも、大きな違いがあります。アメリカ人の家庭に行き、そこに滞在することによって、考えさせられることを、皆さん方は数多く発見できると思います。それらを認識した上で、アメリカでの生活をスタートしてください。まず、皆さんに注意して欲しいことは、そこの家族の一員になりきることです。これがホームステイを円滑に行う上で、最も大事なことかもしれません。また、アメリカ人は、子供に対する考え方が、日本人とは一般的に異なっています。日本の家庭では、子供中心の家庭生活が営まれて、過保護な環境にあるため、子供の親に対する依存心は高く、その結果、親離れ、子離れができにくく、子供の自立心も育ちにくい傾向があります。一方、アメリカの家庭では、子供に対するしつけには、厳しいものがあり、幼少時より一個人として尊重され、自己主張できる、自主自立のしつけと教育があります。日本の母親は、たとえ仕事を持っていても、家庭のすべての家事は、母親の使命と考え、一手に引き受けている場合が多く見られます。しかし、アメリカでは、母親であり、家族があったとしても、他の男性同様、自分の生きがいや自分自身の向上のために、仕事を持ったり、ボランティア活動に参加したり、大学や大学院に通ったりするなど、一人の人間として社会に参画することはごく自然なことです。母親が家庭を留守にする場合は、父親が子供達の面倒を見たり、家事も家族全員で分担し、協力し合って家庭生活が営まれています。家族の一員として生活する以上、参加者も当然それに協力していく必要があります。日本の子供達は身の回りのことを、母親に頼る傾向がありますが、アメリカの価値観では全く相容れないばかりでなく、その考えには全く否定的です。つまり、「自分のことは自分でする」ということが、アメリカ社会の大原則となるわけです。この大原則を中心として家庭生活は動いています。各家庭には、「ファミリールール」というものがあります。それは、共同生活である、家庭生活がスムーズに営まれるように、お互いの分担や協力内容、守りごとを取り決めたものです。皆さんもそれを早く知り、家族の一員として行動してください。

皆さんが、ホストファミリーを通して学びたいのであれば、様々な彼らの活動に積極的に参加することです。日曜日には家族と一緒に教会に行ったり、教会で催される行事に参加したり、家族の週末の計画や活動に、興味を持って同行したり、食事の後のだんらんには進んで入っていったりすることです。英語が分からないからという理由で、すべて引込み思案にならないことです。ホストファミリーは、皆さん方を通して日本の国、日本人の考え方、日本人の習慣、日本人の生活などを知りたがっているわけですから、皆さんもそれに応えられるようにしてください。何事も積極的にトライすることによって、ホストファミリーとのより一層の深い絆が生まれると共に、アメリカの生活習慣、文化、アメリカ人の行動様式、考え方などが、様々な体験によって得られるはずです。

スケジュール表

このスケジュールは大体のひな型です。月曜日から金曜日まで午前中はアカデミックセンターで授業を受け、午後は社会見学や、ボランティア、レクリエーションなどがあります。また、期間中に3回（小学生コースは２回）終日研修が計画されています。土曜日と日曜日は自由で、終日ホストファミリーと過ごします。中・高・大学生コースは、下記のようなスケジュールで全行程24日間です。なお、実際のものは、7月のオリエンテーション会場でお渡しします。

１日目	午前中に九州各県を出発して成田空港へ。夕刻、成田空港を出発し、約9時間の飛行時間を経て空路アメリカへ。時差の関係で到着は同日。空港では、現地でお世話してくださる先生が出迎え、バスでステイ地へ。アカデミックセンターに到着後、ホストファミリーと対面し、各家庭へ。
２日目	午前–オリエンテーション。ホームステイ上の注意点等の説明を先生から受ける。最初の授業では簡単な挨拶や自己紹介など。今日のお弁当は、ホストマザーが作ってくれたサンドウィッチと果物、ジュースなど。 午後–市内散策。郵便局、銀行、消防署、警察署、市役所などを訪問し、説明を受ける。下調べも忘れずに。 夕刻–ウェルカムパーティー。ホストファミリーの手作りの料理によるポットラック（食べ物持ち寄り）パーティー。ゲームやホストファミリーとの歓談で楽しい時間を過ごす。たくさんの人たちと出会える絶好の機会。積極的に話しかけて、仲良くなろう。
３日目 ４日目	土曜日、日曜日はそれぞれのホストファミリーと共に過ごす。ホストファミリーとの過ごし方は十人十色。共有する時間を楽しもう。
５日目	午前–英語の授業。（日常生活で使う簡単な会話の表現、俗語や慣用句について。）今日のお弁当は自分で作ったサンドウィッチ。日本の昼食と比べよう。 午後–レクリエーション。ホストファミリーも交えて、地域のプールで水泳をする。
６日目	午前–英語の授業。（アメリカのお金や買い物での英会話、物価の違いについて。） 午後–スーパーマーケットへ行き、実際に買い物の勉強。アメリカの製品と日本の製品との価格の違いや、品物について比較してみよう。
７日目	世界的に有名な観光地であるサンフランシスコへ終日研修。ゴールデンゲートブリッジ、ピア39、フィッシャーマンズワーフなどを見学。
８日目	午前–英語の授業。（アメリカ人の仕事について。） 午後–地域の新聞社を訪問。プログラムやグループの紹介と、期間中のボランティア活動に関しての紹介を記事にしてもらったり、取材を受けたりする。
９日目	午前–英語の授業。（アメリカにおけるボランティア活動について、日本との違いを考えてみよう。） 午後–ボランティア活動。貧しい人のために食べ物や衣類などを配布する施設で、食べ物を袋に詰めるお手伝いをする。
１０日目 １１日目	それぞれのホストファミリーと自由に過ごす週末。キャンプに行ったり、湖に行ったり、楽しい思い出づくりを。
１２日目	午前–英語の授業。（アメリカの食べ物と食事のマナーについて、日本と何が違うか発見しよう。） 午後–地域の博物館を見学し、説明を受ける。ステイ地の町の成り立ちや歴史を学ぶ。
１３日目	午前–英語の授業。（アメリカの教育について。） 午後–地域の小学校を訪問。折り紙などの遊びや日本の伝統文化を紹介しながら、文化交換会を行う。アメリカの学校を訪問することにより、日本との学校教育の違いや授業の様子、学校での過ごし方を垣間見ることができる。
１４日目	コロンビア歴史公園へ終日研修。1850年代のゴールドラッシュの頃に栄えていた街で、当時の社会生活や歴史的背景を学習する。また、駅馬車に乗ったり、砂金取りを体験したり、ゴールドラッシュ時代を疑似体験する。

１５日目	午前–英語の授業。（アメリカの祝祭日について。） 午後–アメリカの代表的な行事であるイースターや感謝祭、クリスマスなどの行事について、ホストファミリーによるデモンストレーションが行われる。日本の代表的な祝祭日や行事も紹介して、お互いの文化交換を行う。事前に準備をしておこう。
１６日目	朝から午後のボランティア活動の準備で、カーウォッシュ（洗車）のための看板を作ったり、ガレージセールの値札や商品の紹介文を作ったりする。午後は、カーウォッシュとガレージセールを行う。日本から持ってきた不用品や手作りの品などを売ったり、車を洗ったりして、その収益金をアメリカの子どもたちを日本に招待するための基金に充てる。(MNCCジャパンホームステイ P.10)
１７日目 １８日目	ホストファミリーと過ごす最後の週末。この週末は、お世話になったホストファミリーへ自分が何をしてあげられるか考え、それを実行しよう。
１９日目	カリフォルニア州の州都サクラメントへ終日研修。古き良き時代を残す歴史的な街を散策したり、州の政治の中心地である州議事堂などの見学。そこで働く人からの説明を受ける。下調べをして、たくさん質問しよう。
２０日目	午前–英語の授業。（アメリカの公共施設について。） 午後–地域の中学校を訪問。文化交換会の中で友達を作ったり、授業を見学したりする。アメリカの学校生活をしっかり観察して、日本の授業や学校の様子と違う点をたくさん発見しよう。アメリカの中学校で友達になった生徒とも交流を続けていこう。
２１日目	午前–最後の授業。プログラムの評価レポートを作成。プログラムの最後にホストファミリーに渡すプレゼントを制作したり、パーティー会場の飾りつけを作ったりして、サヨナラパーティーの準備をする。 午後–地域の公園へ歩いていき、ピクニックをする。みんなで様々なゲームをしたり、軽いスポーツをして過ごす。ホストファミリーの子供たちも参加。
２２日目	午前–サヨナラパーティーの会場作りと出し物の練習。全員合唱のリハーサルをしたり、個人の出し物の練習をしたりする。 午後–グループに分かれて、パーティーで振舞う日本料理を作ったり、会場の飾りつけをしたりする。 夕刻–サヨナラパーティー。歌や踊り、ゲーム、日本の伝統芸能などを、感謝の気持ちを込めて、ホストファミリーや先生方に披露する。プログラムの集大成であるサヨナラパーティーを全員の力で成功させよう。TCの先生から修了証書を頂く。
２３日目	早朝、アカデミックセンターでホストファミリーと別れ、バスで空港へ。現地の先生は空港まで見送り。搭乗手続きを済ませ、出国手続きをし、約10時間の飛行時間を経て、空路日本へ。機内で感想文を書く。
２４日目	時差の関係で日本到着は翌日。成田空港到着後、入国手続きを終え、バスで羽田空港へ移動し、各県空港へ。各県空港到着後、解散。全てのスケジュールが終了。

申　込　方　法

申込方法

お申し込みには**「参加申込書」**と**「参加申込金」**の2点が必要です。

◇**参加申込書**　巻末の申込書にご記入ください。

◇**参加申込金　5万円**（研修費の一部に充当します。）

以上の2点を南日本カルチャーセンターに現金書留でご郵送ください。申込金は銀行振り込みでも構いません。到着次第、ガイドブック一式をお送りします。

申込先及び振込先

◇申込先

〒890-0056　鹿児島市下荒田3丁目16番19号
株式会社　南日本カルチャーセンター

◇振込先

三井住友銀行	鹿児島支店	普通口座	828282
肥後銀行	鹿児島支店	普通口座	1055554
南日本銀行	本　　店	普通口座	230800
鹿児島銀行	鴨池支店	普通口座	3138706
沖縄銀行	本　　店	普通口座	1278721
郵便振替口座			02010-8-32878

◇口座名　㈱南日本(ミナミニホン)カルチャーセンター

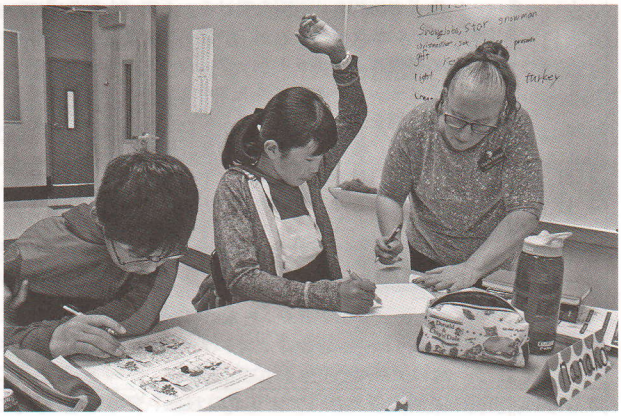
※必ず参加者名で送金してください。

※残金は出発日前日から起算してさかのぼり、21日目にあたる日より前にお支払いください。

参加取消し

参加者のご都合によりお取消しになる場合は、次の取消料をお支払い頂きます。

研修開始前日から起算してさかのぼり40日前から31日前	50,000円
研修開始前日から起算してさかのぼり30日前から3日前	研修費用の20%
研修開始前々日より研修開始当日の研修開始前	研修費用の50%
研修開始後以降、又は無連絡不参加	研修費用の100%



お申し込みから出発まで

① お申し込み
契約の成立となります。ください。受諾書や正式書類等が送られ、参加申込書と参加申込金5万円を送ってく

➡

② 事前学習
日米に関する下調べをしてください。ガイドブックに沿って、英文を覚えたり、

➡

③ 正式書類の提出
指定された期日までに提出してください。トファミリーの決定が行われますので、正式書類に基づいて、グループ編成やホス

➡

④ 渡航手続き
手続き等は、センターが行います。い。米国の税関申告書作成やエスタ申請方は、旅券取得の手続きを行ってくださ有効な旅券（パスポート）をお持ちでない

➡

⑤ 残金の支払い
残金をお支払いください。研修費用のご案内を受け取られてから、

➡

⑥ オリエンテーション
す。日時・会場は事前にご案内します。生活上の注意、準備するものなどを説明しま

➡

⑦ 出発
出発します。7月下旬から数日に亘り、グループごとに

➡

⑧ 帰国
開かれます。帰国して数週間内に、異文化体験報告会が

その他のプログラム条件

下記は、旅行業法等に基づき、参加者に交付する取引条件説明書面および契約書面の一部です。参加申込みに際してはパンフレットを十分ご確認のうえ、本プログラムの内容をご理解いただきますようお願いします。このプログラムは、2019年1月10日の運賃・料金を基準としております。

◈募集型企画旅行契約

このプログラムは、南日本カルチャーセンター（観光庁長官登録旅行業第1355号）（以下「当社」という。）が旅行企画・募集し実施するプログラムであり、このプログラムの参加者（参加者が未成年の場合は、その保護者）は、当社と募集型企画旅行契約（以下「契約」という。）を締結することになります。契約の内容・条件は、パンフレットに記載されている条件のほか、本プログラム条件説明書、出発前にお渡しする確定書面及び、当社の「旅行業約款」（以下「募集型約款」という。）によります。当社は、参加者が当社の定めるプログラム日程に従って、運送・宿泊機関等の提供する運送、宿泊その他のプログラムに関するサービス（以下「プログラムサービス」という。）の提供を受けることができるように手配し、旅程管理することを引き受けます。

◈旅券・査証について

このプログラムには、帰国日まで有効な旅券（パスポート）が必要です。

◈契約書面および確定書面

契約書面とは、パンフレット、本プログラム条件書、受諾書をいい、確定書面とはプログラム開始前にお渡しする研修日程表と、集合解散の案内書のことをいいます。

◈研修地に「海外危険情報」が発出された際の催行中止について

お申込後、プログラムの目的地に「海外危険情報」が発出された場合は、当社は、契約の内容を変更し又は解除することがあります。外務省「海外危険情報」が「渡航の是非を検討してください」以上の危険情報を発出した場合は、当社はプログラムの催行を中止する場合があります。その場合は、プログラム費用を全額返金します。ただし、当社が安全に対し適切な措置が取られると判断して、プログラムを催行する場合があります。この場合に参加者がプログラム参加を取りやめられると、当社は所定の取消料をいただきます。

◈契約内容・代金の変更

当社は、天災地変、戦乱、暴動、運送・宿泊機関等のサービス提供の中止、官公署の命令、当初の運行計画によらない運送サービスの提供（遅延、目的地空港の変更等）その他の当社の関与し得ない事由が生じた場合、プログラム日程、サービスの内容その他の契約内容を変更することがあります。また、その変更に伴い、プログラム費用を変更することがあります。さらに、著しい経済情勢の変動により、通常予想される程度を大幅に超えて、利用する運送機関の運賃・料金の改定があった場合には、プログラム費用を変更することがあります。増額の場合は、プログラム開始日の前日から起算してさかのぼって15日目に当たる日より前に参加者にその旨を通知します。

◈参加者による契約の解除（取消料のかかる場合）

参加者は、所定の取消料を支払い、契約を解除することができます。当社の責任とならないローン、渡航手続き等の事由によるお取消しの場合も、所定の取消料をいただきます。お取消しの連絡は、当社営業時間〔9時～17時（土・日・祝日休業）〕のみお受けします。

◈参加者による契約の解除（取消料のかからない場合）

下記の場合は、取消料はいただきません。

① 当社によって契約内容が変更されたとき。ただし、その変更が募集型約款第29条に掲げるものその他の重要なものであるときに限る。
② プログラム費用が増額されたとき。
③ 当社が参加者に対してプログラム開始日の1週間前までに確定書面を交付しなかったとき。
④ 当社の責に帰すべき事由により、当初のプログラム日程通りのプログラム実施が不可能になったとき。

◈当社による契約の解除（プログラム開始前）

当社は次の場合は、プログラム開始前に、契約を解除することがあります。

① 参加者が当社があらかじめ明示した性別、年齢、資格その他の参加者の条件を満たしていないことが判明したとき。
② 参加者が病気その他の事由により、当該プログラムに耐えられないと認められるとき。
③ 参加者が他の参加者に迷惑を及ぼし、又は団体行動の円滑な実施を妨げるおそれがあると認められるとき。
④ 参加者が契約内容に関し、合理的な範囲を超える負担を求めたとき。
⑤ 参加者の数がパンフレットに記載した最少催行人員に達しなかったとき。この場合、プログラム開始日の前日から起算してさかのぼって23日目（ピーク時は33日目）に当たる日より前に、プログラムを中止する旨を参加者に通知します
⑥ 天災地変、戦乱、暴動、運送・宿泊機関等のサービス提供の中止、官公署の命令その他の当社の関与し得ない事由により、パンフレットに記載したプログラム日程に従ったプログラムの安全かつ円滑な実施が不可能となり、又は不可能となるおそれが極めて大きいとき。
⑦ プログラム費用をパンフレットに記載された期日までにお支払いいただけないとき。この場合、参加者は当社に対し、所定の取消料に相当する違約料を支払わなければなりません。

◈当社による契約の解除（プログラム開始後）

当社は次の場合は、プログラム開始後であっても、契約を解除することがあります。

① 参加者が病気その他の事由によりプログラムの継続に耐えられないとき。
② 参加者がプログラムを安全かつ円滑に実施するための引率者の指示に従わないなど団体行動の規律を乱し、当該プログラムの安全かつ円滑な実施を妨げるとき。
③ 天災地変、戦乱、暴動、運送・宿泊機関等のサービス提供の中止、官公署の命令、その他の当社の関与し得ない事由により、プログラムの継続が不可能になったとき。

当社がプログラム開始後に契約を解除したときは、当社と参加者の間の契約関係は、将来に向かってのみ消滅します。この場合は、参加者が既に提供を受けたプログラムサービスに関する当社の債務については、有効な弁済がなされたものとします。

◈当社の責任

当社は、契約の履行に当たって、当社又は当社が手配を代行させた者（以下「手配代行者」という）が故意又は過失により参加者に損害を与えたときは、その損害を賠償いたします。但し、損害発生の翌日から起算して2年以内に当社に対して通知があったときに限ります。手荷物に関係する賠償限度額は、参加者1名につき15万円を限度として賠償します。また、参加者が天災地変、戦乱、暴動、運送機関等のサービス提供の中止、官公署の命令その他の当社又は手配代行者の関与し得ない事由により損害を被ったときは、当社はその損害を賠償する責任を負いません。

◈特別補償

当社は、参加者がプログラム参加中に、急激かつ偶然な外来の事故により生命、身体又は手荷物の上に被った一定の損害について、募集型約款特別補償規定により、死亡補償金として2,500万円、入院見舞金として入院日数により4万円～40万円、通院見舞金として通院日数により2万円～10万円、携行品にかかる損害補償金（15万円を限度、ただし、一個又は一対についての補償限度は10万円）を支払います。

◈旅程保証

当社は、プログラムに下記の変更が行われた場合は、募集型約款の規定により、その変更の内容に応じてプログラム費用の1%～5%に相当する額の変更補償金を支払います。但し、変更補償金の額は、プログラム費用の15%を限度とします。また、一つの契約についての変更補償金の額が1,000円未満の場合は、変更補償金は支払いません。

① プログラム開始日又は終了日の変更
② プログラムの目的地の変更
③ 運送機関の種類又は会社名の変更

当社は上記の契約内容の変更が生じた原因が以下にある場合は、変更補償金を支払いません。

① 天災地変 ② 戦乱 ③ 暴動 ④ 官公署の命令 ⑤ 欠航、不通、休業等の運送機関等のサービス提供の中止 ⑥ 遅延、運送スケジュール変更等の当初の運行計画によらない運送サービスの提供 ⑦ 参加者の生命又は身体の安全確保のため必要な措置

◈参加者の責任

参加者の故意又は過失により当社が損害を被ったときは、当該参加者は損害を賠償しなければなりません。参加者は、当社から提供される情報を活用し、パンフレットに記載された参加者の権利・義務その他の契約内容について理解するように努めなければなりません。

◈個人情報の取扱について

当社は、お申込みの際に提出された申込書に記載された個人情報について、参加者との間の連絡のために利用させていただくほか、運送・宿泊機関等の提供するサービスの手配、及びそれらのサービスの受領のための手続きに必要な範囲内で利用します。このほか、当社の取り扱い商品のご案内、プログラム参加後のご意見やご感想の提供のお願い、アンケートのお願い、統計資料の作成に、参加者の個人情報を利用させていただくことがあります。また、センター職員や関係者等が撮影した画像や動画を、当社ホームページや印刷物等に、本人が特定されない内容で掲載させていただくことがあります。

◈燃油サーチャージについて

燃油サーチャージは、プログラム費用には含まれておりません。利用航空会社により必要となる場合がありますので、プログラム費用と併せてお支払いください。参加者が燃油サーチャージの徴収を理由に契約を解除される場合は、所定の取消料を申し受けます。

◈募集型企画旅行契約約款について

この条件に定めのない事項は、当社旅行業約款（募集型企画旅行契約の部）によります。当社旅行業約款をご希望の方は当社にご請求ください。

管理運営態勢

① 期間中の現地運営本部設置

プログラム期間中は、日本でのオリエンテーション等で対応にあたっているセンター職員が数名派遣され、南日本カルチャーセンター米国事務所内に現地運営本部を設置し、そこに常駐しております。そして、毎日のグループ活動状況を収集し、安全対策上においても、管理運営上においても、現地での指示命令系統に、時間を必要としない環境で、管理、運営が行われています。派遣された職員の通常の仕事は、各ホームステイ地区に滞在する引率指導者と連絡を密にして、相談やアドバイスを行い、日本の本社とグループ活動現場の間に立つことです。現地の運営本部からの連絡事項は日本の本社を通して行われますが、万一、参加者に生命の危機を伴う緊急事態が発生した場合は、現地本部のセンター職員が窓口となり、直接日本の保護者に連絡するという態勢がとられることもあります。ちなみに、そのような事態が発生したことは、過去45年間で一度もありません。

② センター職員の定期巡回とカウンセリング

ホームステイという異文化生活では、恒常的に、参加者が様々な問題や悩み、摩擦や困難を抱えることになります。それは当然のことであり、その体験があるからこそ、異文化生活に価値があるといえます。但し、それは参加者に対する適切な指導が行われることが前提です。引率指導者は、参加者の日常的な生活指導を行いますが、異文化摩擦を原因とする問題を解決するプロではありません。そこで、プログラム期間中は、日本から派遣されたセンター職員が、定期的に参加者のステイ地に赴き、参加者や引率指導者の相談に乗り、アドバイスをしたり、カウンセリング業務や問題解決に協力していきます。そのため、派遣されるセンター職員は異文化摩擦や異文化理解、国際理解を経験した者で、トレーニングを積んだ者がその職責を担当することとなります。

さらに、長期間の異文化生活を送る際に、引率指導者が男性であるか、女性であるかということは、参加者にとって案外重要な問題であると考えられる保護者は多いようです。先述しました通り、参加者に対する適切な指導や助言は大変重要であり、それを効果的に実施するためには、指導者と参加者の相性や性による差異なども含めて、非常に繊細で、微妙な内容であることも多いとセンターでは認識しています。例えば実際に、引率指導者は男性で、女子の参加者は相談したくても、相手が男性だから相談できないこととか、男子の参加者が女性の引率指導者には、どうしても距離を感じることなどが起きております。このことを踏まえて、センターからは男性職員と女性職員の双方が派遣され、参加者が相談できないような問題が無いように、極力注意を払った中でプログラムが運営されていきます。

③ ホームページ上で、活動状況を常時公開

プログラム期間中、参加者の文化交換会の様子や授業内容、午後からの活動状況を撮影した記録写真を映像ファイルで、参加者や引率指導者、現地指導教師の様子を動画ファイルで、また、引率指導者の活動報告書をテキストファイルにして、様々な情報を現地から本社に送り、下記のホームページ上で、保護者や関係者のために、公開する環境を確立しております。また、連絡事項や活動内容の周辺にある情報提供、事前の準備やもっと詳細なプログラムの内容など、あらゆる情報をホームページで公開しています。URL：www.mncc.jp

④ 病気やケガや有事の対応

病気やケガをした場合、次のような対応がとられます。まず、現地教師と引率指導者の間で、病院へ行く必要性が判断され、必要な場合は、「現地教師」「引率指導者」「ホストファミリー」のいずれかが必ず参加者に同行します。1回の治療で処置が終わるような場合の治療費は、参加者か同行者が現金で支払い、その数日後には、センター職員がその費用を支払者に立て替えて支払い、センター職員が保険会社に保険の手続き処理を行います。参加者や同行者が立て替えられないような金額の場合、センター職員が保険会社と直接交渉します。このようにして、病気やケガが発生しても、現地米国人職員だけではなく、日本から派遣されたセンター職員がその処理にあたります。また、有事の場合に対応できるように、主催者名で参加者全員を対象とした必要最低限の保険に加入しており、その補償額は下記のとおりです。但し、アメリカの医療費は大変高額ですので、各自で任意の海外保険にも必ず加入されることを強くお勧めします。（任意保険につきましては、正式書類と一緒にご案内します）

死亡・後遺障害（特別補償2,500万円を含む）	5,000万円
疾病死亡	2,000万円
賠償責任	10,000万円
携行品（免責3,000円）	15万円

⑤ 安全管理、危機管理の事前学習会での指導

事故や危機を予見したり、その発生を回避することを目的として、安全管理、危機管理の指導を、下記の12項目にわたって実施します。また、過去の参加者達が実際に遭遇したトラブルを、ケーススタディとして指導します。

- テロや暴動への対処
- 事件や事故の回避
- 交通規則の違い
- 緊急事態の自己管理
- 性に関する危機管理
- 禁止事項について
- 自然災害の対応
- 健康管理
- 食事管理
- 金銭管理方法
- 銃社会の危機管理
- その他の危機管理

Questions and Answers

Q01：クラブ活動の試合の日程と重なって、スケジュールが合わないのですが。

A01：出発日は、原則的に7月下旬から数日に亘り、グループごとに出発していきます。センター職員が現地に常駐していますので、ご質問のようなスケジュールの折合いがつかない場合でも、このプログラムは対応できる場合があります。例えば、本来のグループの出発日から遅れて、他のグループと出発して現地で合流したり、少し早めに他のグループと帰国したりすることも可能です。いろいろなスケジュールや日程の関係などで、出発日や帰国日に不都合が生じた時でも、対応することができる場合がありますので、事前に、担当者にご相談ください。

Q02：英会話に自信がありませんが。

A02：コミュニケーションで、最も便利で、効果的なものは「言語」です。当然、我々には母国語というものがあり、その道具を使ってコミュニケーションを図ります。ところが、ホームステイに参加する場合、異言語であるため、その道具を所有していません。だから、コミュニケーションがスムーズにいかないという事実はありますが、全然コミュニケーションができないということはありません。それは、コミュニケーションでは「非言語」によるものが数多くあり、我々は「言語」以上に「非言語」によって多くの情報を得ているからです。例えば、電話を利用してコミュニケーションする場合、そこには「言語」しか存在せず、「非言語」による情報はありません。だから、数多くの誤解が電話でのコミュニケーションで発生するのです。ホームステイの場合、現場に参加者はいます。すなわち、ホストファミリーを始めとするアメリカの人々と、時間と空間を共有していますので、相手に理解しようという気持ちがあり、こちらが伝えたいという意思がある限り、コミュニケーションは可能なのです。ですから、オリエンテーションで、コミュニケーション方法を具体的に指導します。

Q03：観光旅行とホームステイの違いは何ですか。

A03：基本的に、「ホームステイは観光旅行ではない」という言い方をしますが、それは、厳密な表現ではありません。何故ならば、実際にはホームステイという滞在方法ではあるけれど、実質的に観光旅行であるというのは、いくらでも存在するからです。すなわち、ホームステイという形を変えた観光旅行であり、ホームステイとは、生徒のための海外旅行というような現状があります。理念的に、「ホームステイは観光旅行であってはならない」という表現が、適切ではありますが、残念ながら、数多くのホームステイプログラムにおいて、現実は程遠いものがあります。観光旅行とホームステイの違いを端的に述べるなら、「娯楽性と教育性」の違いでしょう。観光旅行はレジャーであり、ホームステイは学習なのですが、その線引きがあいまいな状態になっております。センターのホームステイは、教育性を追求する異文化理解研修プログラムですので、娯楽性の持つ「楽しさ」「面白さ」「気楽さ」より、教育性の持つ「厳しさ」「困難さ」「大変さ」に満ちていることをご理解いただきたいと思います。

Q04：アメリカ以外にプログラムはないのですか。

A04：結論から申し上げますと、このプログラムでは、アメリカしか取り扱っておりません。でも、それにはセンターなりの大きな理由があります。ホームステイは、子ども達に信じがたいほどの多大な影響を与えます。ですから、初めてホームステイする場合、その対象国選定は、大変重要なことと考えております。ご存知の通り、アメリカは世界のリーダーシップを取っている国の一つであることは、誰もが認めるところでしょう。政治においても、経済、教育、産業、科学でも、世界の中心地であり、アメリカ抜きで世界を考えることは、現実的ではありません。もちろん、人種や民族問題、犯罪や治安の問題、環境問題、移民問題など、数多くの国内問題をも内包しつつ、世界で唯一の超大国としての地位を築いています。一方、日本は、経済においてはGDPベースで、世界第3位の経済大国であり、確かな先端技術を有する先進国家であります。そのような国に生まれ育った日本の若者たちが、初めて海外に赴き、その国の家庭生活や市民生活、社会生活を通して、何かを学び、体験し、刺激を受け、動機づけを期待するのであれば、日本以上の先進国家に行くことの必要性を、センターでは優先順位の一番目に考えているわけです。

Q05：一人で参加する勇気がありません。

A05：プログラムに参加するためには、二つの要件が必要です。それは、「親が許可すること」「本人に参加する意志があること」です。簡単な要件ですが、親が許可しているのに本人が希望しない場合や、本人が希望しているのに親が許可しない場合が、非常に多いのです。基本的に、前者は「男子生徒」に多く、後者は「女子生徒」に多く見られるケースです。つまり、男子生徒の場合は、親は参加させようとしますが、本人は行きたがりません。反面、女子生徒は行きたがりますが、親が許可しません。一般論として、親は何故、参加させたいのでしょうか。プログラムの参加に、あなたの両親は何を求めているのでしょうか。おそらく、その必要性を感じているからでしょう。親として、プログラム参加は、子どもであるあなたに必要なことと考えているのでしょう。もし、あなたに参加する勇気がないとするなら、あなたの親は、その勇気をあなたに求めているのかもしれません。参加するという勇気は、自己との戦いです。これまでのすべての参加者は、この戦いの中で、不安になり、弱気になりながらも、一歩前に進む決断を下したのです。でも、その陰には、一歩前に進む勇気がなくて、後悔した人がたくさんいることをセンター職員は知っております。戦わずして後悔するより、たとえ戦って惨敗したとしても、そこに意義を見つけて前進する、そんなしたたかで、向上的な考え方をして欲しいと思います。

Q06：何年生でホームステイするのがベストでしょうか。

A06：このプログラムの中核にあり、根底に流れているテーマは、「自立」です。その意味では、より早くから参加することで、親からの自立に目覚め、客観的な視点を培うことに役立ちます。このことはプログラムの総論的な成果として指摘できます。次に、参加年齢による効率性を論じた場合、絶対的に、どの学年で参加することが最も得策であるという判断は、極めて困難であり、相対性があります。例えば、小学生での参加は、「国際理解に関する動機付け」としての意味合いが濃く、中学生での参加は、「英語学

習への動機付け」と位置づけられ、基本的に15歳以下のプログラム参加は、一言で言えば「きっかけ作り」でしょう。次に、高校生、大学生の参加は、実際に英語という言語を使って、「異文化理解」や「英語力の向上」という実質的内容を伴うものへ、その参加目的は変化していきます。ですから、どの学年で参加すべきかとお考えになる前に、何の目的でホームステイに参加しようとしているのかという視点で、お考えになることをお勧めいたします。

Q07：オリエンテーションの内容を説明してください。

A07：オリエンテーションは2回行われます。1回目は5月から6月の休日に、参加者と保護者を対象に九州各県で行われ、内容は、「異文化理解について」「ホームステイの学習の仕方」「危機管理」「出発準備」などを行います。2回目は7月上旬から中旬の休日に、参加者のみを対象に九州各県で行われ、「集合解散などの説明」「ステイ地について」、異文化摩擦の「ケーススタディ」「規則や注意事項」「グループ学習」などについての説明や打ち合わせなどが行われます。さらに、帰国後は、「異文化体験報告会」が実施され、数多くの国際交流体験者が陥りやすい問題点を指摘し、帰国後の「家庭生活でのあり方」「学校生活でのあり方」などの指導を行ってまいります。これら一連の内容は、この貴重な国際交流プログラムの成果を高めるために、極めて大切なことです。

Q08：アレルギーがあるのですが、大丈夫でしょうか。

A08：アレルギーには、食物アレルギーや動物アレルギー、金属アレルギー、気管支喘息、小児喘息、じんましん等、様々な種類があるようです。例えば、ほとんどの一般的な米国家庭では、猫や犬を始めとする何らかのペットを飼っていますので、動物アレルギーを持つ人は、その症状が発生するかもしれません。また、食物アレルギーのある人は、自分で特定された食材を管理できるでしょうか。もちろん、事前にホストファミリーにアレルギーのある食材を連絡することで、そこでの食生活はある程度協力してもらえるでしょうが、日中の活動中にレストランやファーストフード店で食べる食材を、言葉の不自由な未成年の参加者たちが管理できるかと言えば、大変なことかもしれません。結局、ホームステイ期間中の私生活の部分は、参加者の自己管理に委ねられることになります。アレルギーの症状は個々に異なるでしょうから、各自がその症状の内容や程度や状態を勘案して、判断されるしかありません。また、症状の内容によっては、現地受入機関から医者の診断書の携行を求められたり、ホストファミリーを手配するための別途費用を請求される場合があります。但し、アレルギーによるアナフィラキシー、及びアナフィラキシーショック症状がある方は、参加資格に抵触することになります。(Q13を参照)

Q09：学校の宿題を持っていくことができますか。

A09：宿題を持って行っても構いません。でも、実際に宿題の時間を確保するのは、難しいのが現実のようです。もちろん、往復の飛行機の中や、自宅で夜寝る前にやることは物理的には可能でしょうが、実際に参加した先輩たちは、宿題をやる時間は余りなかったと言っています。また、教材関係の本は意外と重たいので、国際線受託手荷物の重量制限も考慮しながら、必要に応じてご判断ください。

Q10：携帯電話を持参することができますか。

A10：このプログラムでは、携帯電話を持参することは、禁止されています。最大の理由は、ホストファミリー宅で、携帯電話を使ってSNSやネットサーフィンに一人向き合う時間は、ホストファミリーとのコミュニケーションを拒否していると捉えられるからです。そして、その中毒性から、長期の大学留学ですら、英語習得力が低下しているのも、スマートフォンで過ごす時間との関連性が指摘されています。結局、携帯電話と向き合う時間は、日本文化圏の中で生活していることと変わりはなく、プログラムの本質的な目的や趣旨にも影響しかねないことです。そのために、本プログラムでは携帯電話やスマートフォン等の通信機器の持参を禁止しているのです。

Q11：ホームステイ地を希望できますか。

A11：原則として、ホームステイ地は希望できません。なぜなら、このプログラムは観光旅行ではなく、異文化学習を目的とするホームステイプログラムであり、観光旅行のように、希望の訪問先へ行くということが目的ではないからです。センターでは、参加者の性別、学年などを考慮して、適正配置しております。もし、特別な理由で、ステイ地を希望されることがありましたら、担当者にご相談ください。

Q12：現地での授業はどのような内容ですか。

A12：終日研修日を除く、平日の午前中は、毎日、正午までアカデミックセンターで授業が行われます。この授業は、現地の先生が担当し、引率指導者は助言程度で、オブザーバーとして授業に参加されます。授業の内容は、英語で行われますが、英会話を教えるのではなく、毎日の家庭生活に役立つようなアメリカの文化や習慣の紹介が、テキストとして配布され、その内容にそって行われます。例えば、郵便物の出し方、電話のかけ方、お金の説明、アメリカの家庭生活の役割分担についてなどです。また、発声練習や文型の応用、英語の歌やゲームなども取り入れられております。さらに、授業の最後には、毎日、宿題が出され、その内容は、ホストファミリーと一緒にやらなければできないようなものになっています。そのねらいは、宿題を通して、生徒にホストファミリーと会話や交流をさせようというところにあります。

Q13：参加資格に関する規定には、どのようなものがありますか？

A13：① 参加者が生死にかかわる健康上の問題を抱えている場合、及びその可能性がある場合
② 参加者が国際理解や国際交流活動に主体的に参加するのが困難と判断される場合、及びその可能性がある場合
③ 参加者に日常生活上の自立が見られない場合、及び他者の支援や特別な配慮を必要とする場合

上記が、参加資格に関する、センター及び現地受入機関の判断基準になります。主に未成年である参加者を、保護者が側にいない他国においてお世話する以上、生命に関わるようなアレルギーや持病、または何らかの障害をお持ちの場合は、慎重に対応せざるを得ません。例えば、食物アレルギーや動物アレルギーなどにおいて、アナフィラキシーショックなどの重大な症状を引き起こす場合は、参加をお断りしなければなりません。また、てんかん、躁うつ病、自傷行為、重度の喘息が見られる方も、現地受入機関の指示により参加できません。なぜなら、このプログラムが、、基本的にボランティアの家庭に滞在しながら、異文化を学習し、国際交流を行うということ、また、参加者が家庭生活や地域社会で活動する際に、日本の文化や価値を紹介したり、逆に、同様のものを米国から吸収する等の国際理解の

活動を行うこと、そして、お世話してくださるホストファミリーの家庭において、日常生活上での自己管理ができることなどが、必須となってくるからです。何か参加者の参加資格上のこと等でご心配な点がございましたら、申し込まれる前に、必ずセンターにご相談ください。

Q14：治安は良いのでしょうか。

A14：ステイ地の選択については、センターの44年間のホームステイ実績を活かして、特に考慮されています。参加者が安全、かつ快適に生活できるよう、郊外にステイ地を設けてあります。しかし、この質問の中で最も大事なことは、「危機管理の指導」にあるとセンターでは考えております。自国が極めて安全な環境であるがゆえに、我々日本人は、海外でも同様の感覚で過ごしてしまいがちです。そのような意味と、そのような姿勢でいる限りは、治安が良いと答えられる海外は、現存しないのかもしれません。このような視点に立って、センターでは「危機管理の指導」に徹底したオリエンテーションを開いております。特に、これまで参加した先輩達が引きおこしたトラブルをケーススタディとして学習し、どう行動すべきであったかを指導します。また、期間中はセンターの日本人スタッフが常駐しており、異文化摩擦のカウンセラーとして問題解決にあたるなど、万全の態勢で臨んでおります。過去45年間にわたり、1万6千人を超える参加者が何ら事故、事件に巻き込まれることなく、プログラムが運営され続けていることも、このような理由に基づくものと考えております。

Q15：ホームシックは、どうすればいいのでしょうか。

A15：ホームシックといっても、人それぞれに症状は異なります。単なる、「日本が恋しい」「日本食が食べたい」「お母さんに会いたい」というような気持ちは、ほとんどの参加者が期間中に一度は思うもので、むしろ自然なことですので、この程度で心配することは何もありません。ところが、これらのものが、「食事がまったく喉を通らない」「ふさぎこんで、無口になったり、問題行動を起こそうとしたりする」「泣きわめく」などと、段階的に異なる症状に発展していくことが見られます。このような症状が見られるようになった場合、センター職員がカウンセラーとして対応してまいります。通常は、時間の経過とともに症状は軽減していきますが、これが長引くようだと、異なる問題に発展することがあります。つまり、泣きじゃくり、ふさぎ込んで、話をしようとしない参加者の有様に、周囲の者は振り回され、お世話する側が閉口してしまい、ホストファミリー宅を出るという事態が起こるのです。このような重度の事態になると、途中帰国という判断も現実になります。ホームシックを治す薬はありません。唯一、異文化に適応する努力だけです。

Q16：おこづかいは、いくら必要ですか。

A16：このプログラムは研修です。従って無駄使いは厳に慎んでください。高額のお金の所持はトラブルの原因となります。以上の事から、センターでは下記の金額を最高額としておりますので厳守してください。

小学生　250ドル、中学生　300ドル
高校生・大学生　400ドル

Q17：期間中、現地の様子がわかりますか。

A17：ホームステイ期間中、センターでは現地の様子を、センターのホームページ上で公開しております。グループ活動の様子を日記形式で報告し、写真もグループごとに、掲載いたします。また、引率指導者や現地の先生、参加者の様子などもグループごとに動画ファイルにして、日本の保護者や関係者の皆様がご覧いただけるようにしてあります。昨年のものは、現在も公開中ですので、ご参考までにご覧ください。
URL:www.mncc.jp

Q18：申込み後、どの様な準備をしたらいいのですか。

A18：申し込み手続きをされてから、皆さんがやらなければならないのは日米に関する事前学習や英語の勉強です。申し込み後、センターからガイドブックが送られてきますが、それを利用することで、日米について下調べがしやすいようになっています。また、皆さんがホームステイ期間中、必要と思われる238の英会話文を掲載してあります。もちろん、発音例を録音したCDもお渡ししますので、出発までにこの238文を丸暗記するよう心がけてください。特別、英会話学校に通う必要はありません。なお、研修準備や、おみやげ・旅行用品などに関しては、オリエンテーション（事前研修会）を開き、その際に詳細を説明しますので、それまでは、日米に関する事前学習や英語の勉強を除いては、一切準備されるものはありません。但し、申し込み後にセンターから渡される正式書類は、指定された期日までに必ず提出してください。また、旅券（パスポート）申請はなるべく早めにお済ませください。

Q19：ホームステイ期間中、いろいろなトラブルが発生すると聞きましたが、本当ですか。

A19：本当です。カルチャーショックやホームシック、病気や怪我など、トラブルは大なり、小なり、必ず発生します。ですから、異文化学習においては、「始めに問題ありき」という考え方が、センターにはあります。センター職員が異文化交流アドバイザーとして常駐するのもそのためです。でも、このトラブルを恐れるより、トラブルから何を学習するかという姿勢の方が大事です。つまり、ホームステイに参加するということは、この異文化ならではの違いに対して、どう対応するかなのです。その違いに対して戸惑いながらも、刺激を受け、好奇心が生まれ、さらなる興味を抱けば、そこには知的向上心や自主性、問題解決力が生まれます。参加者がこの方向へと流れていけば、トラブルを自覚することはありません。ところが、もし、その違いに戸惑い、閉口し、不快に感じ、排他的になれば、異文化での生活には苦痛が伴いトラブルとなり、周囲の方々を巻き込んでいきます。そしてその時が、センター職員の出番なのです。それでも、不測の事態として、万が一、持病や体調の急激な悪化、異文化生活への過度の不適応など、様々な症状を理由に、参加者の安全上、プログラムを続けることが困難な状態が起こった場合、早期に帰国するという対応がとられる場合があります。この場合、あらかじめ出発前に予定された旅程を変更して、新たに発生した費用は、保護者のご負担となることをご承知ください。

Q20：詳しくプログラムの説明を受けたいのですが。

A20：福岡県以外の九州各県で、プログラム説明会を行っています。説明会では、各県担当者が約3時間かけて、プログラムの詳細について説明します。しかし、説明会の日程にご都合が合わないなどの場合は、担当者が個別に電話などで、ご説明させていただきますので、お気軽にご連絡ください。また、このプログラムの契約に関し、担当者からの説明にご不明な点がございましたら、ご遠慮なく裏表紙に記載の総合旅行業務取扱管理者にご質問ください。総合旅行業務取扱管理者とは、契約取引の責任者です。

引 率 指 導 録

熊本県宇土市立鶴城中学校教諭　平田　早紀

7月29日（日）

待ち待った出発の日。バスが出発する時、大きく手を振るご家族の温かいまなざしがとても印象深かったです。熊本、宮崎、鹿児島の混合グループで、異なる学年の集団ですが、積極的な生徒がどんどん話しかけていき、少し緊張気味の生徒もいつの間にか打ち解けていて安心しました。出来立てのチームですが、みんな意識が高く、頼もしかったです。「出発初日に何もないわけがない！」と思っていたので、常に注意を払いながら頂いたスケジュールをこなしていました。ところが、事前にあらゆる方から情報を頂いていたお陰で、ほとんど大きなトラブルもなく、全て時間通りにスムーズに進みました。インチョン空港での乗り継ぎやアメリカの入国審査もみんな落ち着いて対応することができたようです。唯一予定通りにいかなかったのが、バスの到着時刻くらいで、パーティースタートが大幅にずれこんでホストファミリーが大変そうでした。ウエルカムボードやたくさんの料理をもってきて下さって緊張気味のみんなもほっと笑顔になれました。これからが本番です。きっと色んなドラマが待っているでしょうが、明日の朝どんな話が聞けるかが楽しみです。

7月30日（月）

朝からそれぞれのホストファミリーに送ってもらい、8時過ぎには全員が学校に到着しました。来て早々、ホストファミリーとの出来事を話していましたが、衝撃の連続だったようです。犬が６匹もいたり、家にプールがあったり、ものすごく広い庭があったり、トランポリンがあったり、夜９時からクッキーを焼いたり、様々な家庭があったようですが、日記を読むとみんなHappyで安心しました。こちらは日が沈むのが遅くて、夜8時過ぎでもまだ外は明るいです。体が対応できているかどうか、時差ボケはないか心配しましたが、18人全員がよく眠れたと答えてくれました。午前中の授業は、本プログラムの説明とホームステイのルールの確認、ネームカードの作成、自己紹介カードを書きました。初めてのAll Englishの授業に戸惑いを隠せない様子です。私は教室後方に待機していますが、授業にはできるだけ介入しません。分かったら「わかりました。」分からなければ「わかりません。」と自分たちで問題解決できる力を身につけてほしいと思うからです。午後からは自己紹介を行いました。初日にしてはみんな流暢に英語を話せていたので、TCの先生たちも驚かれていました。私もみんなの英語を聞くのは初めてだったので、堂々と発表する様子を見て感心しました。

7月31日（火）

今朝はなんだか全体的に昨日より少し疲れたようにも見えました「ホームシックじゃない？」と何人かの生徒たちに聞くと約2名が目を合わせていました。話を聞くと夜中に目覚めてしまうようです。日記を読むと「アメリカは就寝時間が早いからその分早く目が覚めてしまうのかも。」とか「学校が終わるのが早くて昼寝をしてしまったのが原因かも。」とかポジティブに捉えている生徒がほとんどだったので、ホストファミリーとの関係が悪くないことは確かなようです。そうは言っても、そろそろ悩みが出始める頃だよなーと思いながら、みんなの顔色を伺っていると、一人の男子が手を挙げて登場してきました。「I'm happy! I'm happy! I'm very happy!!」と満面の笑みでみんなの集まるカフェテリアへ。彼は最年長の少年ですが、彼がしゃべりだすといつも周りの空気が和やかになります。おかげで少し暗かった朝の雰囲気も一瞬で明るくなりました。

8月2日（木）

今日は朝から15度しかなくて、みんなジャケットを羽織っていました。「ありったけの上着を着てきたほうがいいかも」と昨日のミーティングで話していたので、みんな余分に何か羽織るものをもってきていました。Karen先生も珍しく長袖ジャケットを着こみ、「You're gonna freeze!」と何度も叫んでいました。みんな覚悟を決めてバスに乗り込みます。カナダの国境近くのPeace Arch Parkに着いた途端、雨がやみ、サンシャインが見えてきました。みんなジャケットを脱ぎだします。アメリカとカナダを結ぶ道にはそれぞれの国への入国審査ゲートがあり、そのゲート間のスペースが「どちらの国でもない平和な公園」として多くの人が訪れる場所となっているそうです。カナダ国境ということもあり、いつもよりテンションが上がり気味。その後は海岸BirchBayに行き、班対抗でゲームをしました。その後は近くのモールへ行き、いつもはホストファミリーと買い物をしますが、今日は自分ひとりでお会計に向かいます。初めての経験でドキドキしたようですが、友達や家族、いつもお世話してくださるホストファミリーへお土産を買えて満足気でした。

8月3日（金）

午後からは老人ホームの訪問です。建物はホテルのように美しく、職員はアロハシャツやレイをかけてとても明るい雰囲気でした。入っただけで何かワクワクするようなそんな印象を受けます。おばあちゃんたちは、みんな好きな色のネイルをされていて、とてもおしゃれで、生徒たちも驚いていました。同じ施設でも日本とは少し違うイメージだと感じていたようです。生徒たちの合唱タイムでは、最初は緊張していた生徒たちも歌い始めるとだんだん声が出るようになり、歌い終わると、「Please sing one more time!」とリクエストがあがり、みんな口を大きくあけてシニアの方々に届くように精一杯歌います。シニアの方々、職員、TCの先生たちも本当に嬉しそうでした。みんなの喜ぶ顔を見て生徒たちもとても満足気でした。その後は日本からもってきた新聞紙と折り紙を使って、皆さんと作品作り。うまく英語は使えないけど、「Like this」と自分で折って見せて教えている生徒もいました。それぞれの話す様子を見ていると、「Like」の使い方が、徐々にアメリカらしくなってきたなと感じました。きっとホストファミリーの英語が「耳」をはじめ「体全体」に染みてきた証拠でしょう。とても自然に使えていることを嬉しく思います。「伝えたい」「わかってほしい」という思いがあれば、正しい表現でなくても伝わるということを学んでくれた気がします。日本からポケットアルバムをもってきて説明をする人もいました。日本からのお菓子を渡す人もいました。最後はお互いに抱き合い、「元気でね。ありがとう」と伝え合います。いつも教師の指示を待つのではなく、自分で考え、自分で行動できるようになってきました。こういった主体性もこの一週間でどんどん伸びてきていると実感します。10代の吸収力は本当にすごいなと思いました。今日は多くの場面で「心が通った」という経験をしてくれたと思います。日本人同士でも日本人と外国人でもそういった「心が通う」経験は「次へのチャレンジ精神」を育てます。

8月13日（月）

いよいよホームステイも最終週になりました。朝の学活ではサヨナラパーティーのことについて話しました。劇には全員が出演するので、それぞれの個性が見えるような作品にしてほしいです。あとはこの3週間で身に着いた度胸と英語力で頑張ってください。それが終わると、ホストファミリーへの心のこもった手紙を書きます。驚いたのは、「文法が不安で書けない。」という生徒はほとんどいなかったことです。これは、きっと英語は「言語」であり、「教科ではなく、伝える手段であること」を生徒たちが認識し始めた証拠だと思います。「正しく書く」よりも「伝えること」が大事だということをこの2週間で学ぶことができました。英作文のノートで毎日TCとやりとりをする中で「自分もできる」という自信を育むことができました。ホストファミリーもきっと喜んでくれることでしょう。

8月17日（金）

今日はいよいよ最後の登校日。「もう3週間たったなんて信じられない。」「早すぎる！」今日のパーティーでは、「出会ったみんなに楽しんでもらえるよう最大限のおもてなしをしよう。」と誰しもがそう思っていたはずです。今日の授業では一昨日みんなが書いた「将来の夢」についてについて一人ひとり発表する時間が与えられました。最後の授業にふさわしいと思いました。日本ではこれくらいの年齢の生徒にとって「あなたの夢は何？」という質問はみんなとても答えるのが難しいようです。実際に私もそうでした。「こんな仕事についてみたいような、みたくないような...。」そんな悩みがつきものですよね。そういう気持ちを察したのか、カレン先生は自分の中学生の頃の夢や、色んなことがあってその夢を１００％叶えられたわけではないこと、を話してくださいました。少し難しい単語もあったので、生徒たちは全てを理解するのは難しいかもと思いましたが、みんな真剣に聞いていました。その中でも一番印象に残ったのは、「Just stick with your dream」（自分の夢とずっと一緒にいなさい。）という言葉です。カレン先生の言い方がまた全然気取っていなくて、「自分の夢」がとても身近に感じられるいいフレーズだなと感じました。自分の発表をためらっていた生徒も「迷いある夢」に少し自信をもってくれたようです。ある女生徒は自分のメモ帳を持ってカレン先生が離された内容をメモ帳に書いてもらえないかと、直接頼みに行っていました。それほど、心揺さぶられた話だったのだろうと思います。今回書いた「自分の夢」の原稿は、日本に持ち帰りますが、是非大事に取っておいてほしいです。カレン先生は、「いつでも見れるように、トイレに貼っておきなさい。」と言っていましたよ。そして、最後はサヨナラパーティーの練習と会場準備をしました。30分という限られた時間で実行委員会が本当によく頑張ってくれました。最後の修了証書授与では、一人ひとりの名前が呼ばれて、まるで映画のワンシーンのようです。名前を呼ばれたら、みんなで拍手をしてくれるのですが、どの家庭も自分の生徒の時には一番大きく拍手をしてくれていました。まだまだパーティーの余韻に浸っていますが、明日からは最後の週末です。ホストファミリーと一緒に楽しむことが彼らへの大きな恩返しになることを忘れないでほしいです。

8月22日（水）

無事に鹿児島空港に到着しました。家族の方もみんなと会えるのを待ちわびていらっしゃいました。家族に会えてうれしい反面、たくさんの涙も流しました。永遠の別れではないことはわかっていますが、3週間の思い出が濃密すぎて、なんだか卒業式のようです。解散式後にある保護者から言われたのですが、自分のレポートがどれ程重要な役割を果たしていたのかがわかりました。自分の学校の生徒ではありませんが、今後とも彼らの成長を心より祈念しております。

引率を終えて

鹿児島県日置市立日吉中学校教諭　赤﨑　博武

「先生は、なんでアメリカに行こうと思ったのですか？」とホームステイ中に生徒達から聞かれることが何度かあった。おかげで今回の滞在中に、20年以上前の自分の心の動きをじっくりと振り返ることができた。日本の外に出てみたい。外国の人々の文化を肌で感じたい。野球をアメリカでやってみたい。こんな気持ちが15才だった私の心を動かし、日本を出るきっかけを与えてくれた。費用もかかることなので、両親に相談すると、父はすぐには認めてくれなかった。今考えると私の本気度を確かめたかったのだと思う。初めて英語の勉強を本気で頑張り、必死に部活に打ち込み、新聞配達で貯金をしたりもした。少しは本気が伝わったのか、私は16才の時にMNCCで一年間アメリカの高校留学に行く許可を得た。すぐにOKするのではなく、私の本気度を試してくれたことには今でも両親に感謝している。なぜならば、その準備に費やした時間が留学中の苦しさを乗り越える力になったからだ。その後、アメリカに渡った私は、たくさんの温かい人たちと出会い、数え切れないほどの貴重な経験をした。それらは今でも私の財産になっている。今回23人の若者たちの初めての異文化体験に、引率指導者として参加させていただいた。彼らの楽しそうな姿だけではなく、予想を超える状況に驚く姿や、自由の効かない環境にもがき苦しむ姿を見て、私も初心にかえり、忘れかけていたチャレンジ精神を思い出すことができた。時に人は安全に舗装された道だけを進もうとする。私も２児の親として子供に荒れたオフロードを進ませるのは勇気のいることである。しかしながら、オフロードでしか学べないことも人生にはある気がする。この23人がこの体験をそれぞれの人生でどう生かしていくかが楽しみである。そしてまた新たな目標が心の中に生まれる日も近いだろう。その時はこのプログラムに参加した勇気を思い出し、一歩を踏み出してほしい。意志あるところに、いずれ道は拓けると私は信じている。

長崎県長与町立長与中学校教諭　吉岡　幸季

初めはとっても不安だった引率も、みんなのおかげで無事に乗り切ることができました。偶然集まったとは思えないくらい、息ぴったりで居心地のいいメンバーでしたね。私は、もう一つ自分の学級ができたような幸せな気持ちで毎日を過ごしました。アメリカでの毎日は、みんなの成長に驚く日々でした。私はみんなと過ごす中で、人の成長は無限大だと感じました。毎日生徒と接する教師として、伸び伸びと成長できる、そんな環境や言葉が大切なのだと改めて思いました。そしてアメリカで感じたことの一つに、「日本について知っておくこと」の大切さがあります。アメリカの人は日本にとても興味を持ってくれています。英語ができても、日本について話すことができなければもったいないと思いました。今回のアメリカでの出会いや経験は、みんなにとって大切なものになると思います。今後は学校にいるALTの先生に英語で話しかけてみてください。ホストファミリーとのメールや文通で英語を使うこともいいと思います。英語をずっと楽しむために、日本でもできることにどんどんチャレンジしてください。私も今回の経験を活かして、毎日の授業をもっともっと楽しくできるように頑張ります。私がアメリカで出会った人たちに学んだことは、「優しさ」「誰かが喜んでくれることが嬉しいという気持ち」「大切な人を精一杯愛するということ」「自分の好きなことをとことん極めること」です。わたしもそんな綺麗な心を持った素敵な人になりたいと思いました。帰国後、「平成最後の夏」という言葉を耳にします。アメリカに行く前は考えてもいなかったけれど、「平成最後の夏」ってなんだか凄いことのような気がしてしまいます。実は私は平成元年生まれ。平成最後の夏に、こんな素敵な経験ができたことは何か大きな意味があるのだと思います。今回出会ったみんなと共に、新しい日本を引っ張っていける、そんな存在になれるよう、毎日全力で過ごしていきたいと思います。

大分県別府市立中部中学校教諭　河本　英樹

アメリカで実際に生活をして、日本との生活様式や文化の違いを知り、自分の意見をきちんと言わないといけないことや言葉が通じないことの不便さやもどかしさなどを経験したり、ホームステイを通して人々の優しさに接したりしました。そんな体験を通して、日本やアメリカの良さや、日本では当たり前であったことが当たり前でないことなどを知ったことと思います。皆は、日本とは違う生活や文化の中で生活をすることで、それまでとは違った物の見方や感じ方ができるようになったのではないかと思います。この24日間の貴重な経験をこれからの生活に活かしてほしいと思います。これからますますグローバルな社会になっていきます。様々な国の方と交流したり、勉強したり、仕事したりする機会が増えてきます。英語を勉強することはもちろんですが、様々な分野に興味をもって学習をし、視野を広げてほしいと思っています。

沖縄県恩納村立安富祖中学校教諭　東太田　理恵

私が24日間ずっと大切にしていた言葉があります。それは「Thank you」です。ホームステイに旅立つ前のオリエンテーションでも濱田社長から感謝の気持ちと言葉についてのお話がありました。アメリカに着いてからもパム先生・キャシー先生、スーザンさんからも「Thank you」についてのお話がたくさんありました。皆の日誌にはたくさんの感謝の気持ちと言葉が毎日記されていました。解団式でMさんが代表あいさつをしました。そこで、Mさんはたくさんの「感謝」を語ってくれました。私はMさんのあいさつを聞いたときに「ああ、良かった！」と思いました。英語や異文化だけではなく、きちんと人としての本質も磨くことができた3週間だったのだと感じました。この3週間、私たちはたくさんのことを経験し、学ぶことができました。英語学習の重要性、アメリカでの生活スタイル、異なる文化を理解し受け入れる姿勢、挑戦する前向きな気持ち、感謝を伝える言葉と行動力、25名の研修生は確実に成長することができたと思います。この研修で学んだこと・得られた力を、これからの自分の進路や生き方に活かして欲しいと思います。帰国前に「もう一度、この場所に戻ってくる！」と多くの研修生が口にしました。私が高校生の頃にアメリカで過ごした日々と同様に、今回のプログラムも研修生にとっては大切なものとなったようです。研修生の夢が再び叶うことを陰ながら応援できたらと思います。25名の研修生との出会いはとても大きな宝物となりました。また、アメリカで出会ったたくさんのステキな方々とのconnection（つながり）を持てたことも宝物です。

宮崎県都城市立祝吉中学校教諭　加藤　沙帆

３週間のレポートを読み返すと、「感謝」という言葉をよく使っていました。生徒たちにとっては、アメリカホームステイを経験させてくれた「家族」への感謝。受け入れてくれたホストファミリーやTCの先生たち、周りの人たちへの感謝。「感謝」の気持ちを忘れないように生徒たちに言い続けた３週間でした。生徒のみなさんが、このプログラムに参加したきっかけは様々だったと思います。「様々な文化を学びたい」「本場の英語を学びたい」などの積極的な理由もありましたが、中には「親に言われて・・・」という人もいましたね。後になってから、「ぎりぎりまで行きたくなかった。」「途中で帰りたかった」などの話も聞きましたが、最後はみんな笑顔で「来て良かった！」「帰りたくない！」という気持ちになりましたね。この３週間の経験は、生徒のみなさんにとってかけがえのないものになったということは言うまでもありません。この貴重な経験をどのように生かすか、大事なのはこれからです。ホームシック、体調不良、言葉の壁・・・様々なことがありましたが、20人全員が無事にこのプログラムを終了できたことをうれしく思います。３週間という短い期間ではありましたが、皆さんは私にとって大切な生徒です。この仲間、出会いを大切にこれからの人生につなげていってください。

私の小日記

大分県立大分上野丘高校2年　山村　ももか

7／24（火）	Puyallupのグループのみんなはとても良い人ばかりだと思いました。羽田空港でほとんどのメンバーの名前を覚えることができました。初めての海外でこんなに長いフライトは初めてなので疲れました。きつい移動だったけど、飛行機の中からアメリカ大陸が見えた時、「ついにアメリカだ！23日間を充実させよう！」と思いました。アメリカの景色は日本とは全く違い、シアトルに着いてスタディーセンターに向かう道中も発見ばかりです。ウエルカムパーティーで他の人がホストファミリーに迎え入れられている時、とても緊張しましたが、私のホストファミリーと会った瞬間笑顔でハグしてくれました。家も素敵です。これから頑張ります!!
7／27（金）	まだ時差ボケがあるのか、昨夜あまり眠れなくて1時くらいに寝付くことができました。10時30分位から電気を消して寝ていましたが、なぜか心臓がバクバクしていて、寝られない間、日本の家族のことばかり考えてつらかったです。だから今日どうなるかな？と心配していましたが、グループのメンバーとも仲良くなれてきたからか、今までより心が落ち着いていました。サンドウィッチは一つしか食べられなかったけど、フルーツは美味しく食べられました。
7／30（月）	学校での授業で今日はレベッカ先生の授業を受けました。先生に対する態度の悪い人がいました。クリスタル先生の時にはいませんでしたが、先生が話をしているのに、隣の人と話しをしたり、英語だけを話すように言われているのに、日本語で話したりするのは失礼だと思いました。一回だけならまだしも、何回も繰り返すので良くないと思います。授業の後半で現地責任者の人がきて、そのことで怒られました。私も改めて気を付けようと思いました。その責任者の方から「Your English is so good!」と言われ、嬉しかったです。その方の日本語も上手でした。午後は、Meeker Mansionに行きました。歴史を感じることができ、とても良い時間でした。今夜、ホストシスターに「ホームシックになっている。」と言ったら、「ここもあなたの家よ。あなたの2つ目のね。」と言ってくれました。
7／31（火）	今日はランチ前に外でゲームをしたけど、やっぱりアメリカ人はダンスが上手かったです。アメリカの高校のパーティーの話を聞いたけど、アメリカの子供たちは、いわゆる「パリピ」になるように育てられているなぁと思いました。プールにも行きましたが、洋楽が流れていてバスケットボールのゴールがあったりと、日本とはだいぶ違いました。もし、アメリカの高校に3年間留学することになって、この環境に慣れることができたら、日本の何十倍も刺激的で楽しい毎日を過ごせるだろうなと思いました。でも私は日本が好きです。働くのはやはり日本がいいと思っています。家に帰ってみんなでピザを食べました。美味しかったです。ホストシスターが、私に「モモカは静かだね。」と言っていましたが、困ることはなかったです。今日はホストファミリーと仲良くなれたような気がします。
8／1（水）	今日は一番楽しみにしていたレーニア山に行きました。日本でたくさん調べていたので、なおさら興味がありました。行きの道中はずっと美しい景色を見ることができました。レーニア山を近くで見て、富士山には似てないけど、本当に感動しました。歩くのはきつかったけど、美しい景色を見ることができたので、良かったです。緑と山の雪の白さがとてもマッチしていました。レーニア山の水はとてもきれいでした。レーニア山のアメリカ熊を見てみたいと思っていましたが、それはやはり本当に出くわしてしまうとまずいので見なくてよかったのかもしれません。レーニア山の下でランチを食べて、空気も美味しかったので、なおさらランチが美味しく感じました。周りの人に注目されながら、アメリカのマウントレーニアの下で歌ったり踊ったりすることは一生ないと思うので良い時間が過ごせたと思います。お土産もたくさん買えてよかったです。家に帰ったら人がきていて、みんなでマクドナルドのハンバーガーを食べました。本場なはずなのに、日本の方が美味しく感じました。先日のガールスカウトのキャンプで友達になった子がきていて、チアリーダーらしく、トランポリンでジャンプを見せてくれすごかったです。その子たちと意気投合してガールズトークをしたり、ゲームをしたり映画を見て寝るまでずっと一緒にいました。心から楽しかったです。
8／2（木）	今日の午後のゲームはルールを理解するのが難しかったけど、アメリカのゲームを知ることができてよかったです。家に帰ると、ホストシスターが「今からキャンプに行くよ。」と言うので、わけもわからぬまま連れていかれました。最初ショッピングセンターについて、5歳のシスターのファッションショーを見ていましたが、15歳の長女がなぜかものすごく機嫌が悪くて、キレていました。ホストファーザーが「Bad Day, Wrong day」と言っていました。車でホストシスター達とファザーと3人で最悪なムードで、長女が爆音でラップをかけて、私も嫌な気持ちになりました。好きな曲だったけど嫌いになったかもしれません。その後、ガールスカウトのキャンプに着いて、ホストファザーとマザーのお手伝いをしました。そこでは色んな人と話しをしたり、ハンバーガーやお菓子を食べたり、ステージの発表などを見たり、アメリカのキャンプを楽しめました。色々あったけど、ホストファミリーとも仲良くなれているので良かったです。結局は良い一日で充実していました。
8／6（月）	週末をクリスタル先生の所で過ごしたので授業も受けやすかったです。授業の中で聞いてびっくりしたのが、ホストシスター二人は姉妹だと思っていたのに、妹のLillyは、マザーの孫娘だったということです。実の子供はMalenaだけだと聞いて本当にびっくりしました。ホストペアレンツがバツイチだったことも驚きでした。ホストシスター二人はこのことを知っているのかとても気になります。とても複雑な家庭でした。午後のハイスクールツアーでは、イメージしていたアメリカの高校とは結構違いました。日本の大学みたいな感じでした。日本の高校より楽しそうではあるけど、特に通いたいとは思いませんでした。家に帰ってからは、リビングにいるように心がけました。そして宿題のインタビューをホストファミリーにしてみました。明日はホストシスターの誕生日です。
8／7（火）	今日はホストシスターの16歳の誕生日です。朝８時くらいに家を出ました。家の前にかっこいい青い車が止まっていました。ホストシスターが車の免許をとり、今日運転免許証を取りに行きました。今日はMalenaの初めてのドライブの日でした。待っている間にMalenaと二人でドライブスルーに行って桃のスムージーを買ってもらいました。タコマの海辺のレストランでディナーを食べました。マザーのお勧めの料理はとても美味しかったです。家に帰り着いた時、Malenaが私のバースデーカードを置き忘れたので「Don't forget my card!」と言うと喜んでくれ、ハグしてくれました。
8／9（水）	今日は、午後の活動でボーリングに行きました。ストライクやスペアも出て楽しかったです。でも他の人が日本語で話したり、言うことをきかなかったり、失礼なことをしていて、クリスタル先生の機嫌も最悪でした。みんな自分のことしか考えていないし、全然周りのことを見ていないからこういうことが起きるのだと思います。もう少し、チャレンジし、感謝する気持ちを持った方が良いと思います。もうこのプログラムも終わるけれど、家族が払ってくれたお金をムダにしないためにも、自分の時間とこの最高の機会を自分のものにするためにも、残りの日数も頑張ります。明日はシアトルに行きます。タコマまでしか行ったことがないので、楽しみです。ワシントン大学とスペースニードルもしっかりと目に焼き付けます。
8／13（火）	午後はサヨナラパーティーの打ち合わせをしました。桃太郎の劇はアメリカの人に理解してもらえるかわからないけど頑張ります。ホストファミリーが面白いと思ってくれるような劇にしたいです。3週間あっという間でした。

感想文より

ホームステイが始まったアメリカ第一週目は、自分にとって身体的にも精神的にもきつく、苦しい一週間となりました。食欲もなく、何かを食べようという気持ちにもなれず、ホームシックにもなりました。この一週間を支えてくれたのは引率の先生とグループのメンバーで、彼らのお陰でアメリカ一週目を乗り越えることができました。私は家族に甘えていたということに、異文化に触れることで気づくことができました。アメリカで学んだことを活かし、自分で率先して家族の一員として出来ることを探して行動していこうと思います。特に祖母や母の家事の手伝いをしていこうと思います。アメリカで過ごした全ての時間が私にとって一生の宝物です。もちろん楽しいことだけではなく、苦しいことやつらいこともあったけど、その全てが私を大きく成長させてくれる大きなカギになると思います。

昨年の参加者体験談

■私が印象に残っているもの

宮崎県宮崎大学附属小学校５年　山内　七海

アメリカ（オレゴン）に着き、一番印象に残っていることは、何もかもが大きくて日本と比べ物にならないくらいだったことです。地図で見るように、アメリカはとても大きくて、高速道路も４車線でおどろきました。私が一番すばらしいなと思ったことは、町（市街地）では、たて物がじゅうじつしているだけではなく、自然もたくさん活用し、木（緑）もいろいろな所にうえていて、たて物、自然、店などがうまくちょうわしていたところです。アメリカの文化や自然、生活などいろんなことを知ることができました。

■自分の国を誇りに思うアメリカ

沖縄県昭和薬科大学附属中学校２年　上原　夕奈

私がアメリカで一番驚いたのは、自分の国であるアメリカをとても大切にしているという所です。住宅街の家々にはほとんど玄関の近くや正面から見える位置にアメリカの国旗が堂々と立てられているのを見て、アメリカの人は自分がアメリカ人であることに誇りを持っているんだなと感じました。ホストファミリーに連れて行ってもらったジャイアンツの野球試合の前にも、国歌を真ん中で歌っている人に続いてみんな片手を上げ、もう片方の手で胸をおさえて歌っているのを見て、素晴らしい国だなと感じました。授業のやり方も日本とは違い、みんなで一緒に考えたりするのが多くありました。失敗を恐れずに手を挙げるというのは、案外難しいことですが、みんなで一緒にやるとあっという間に楽しい時間が過ぎていくものなのだなと思いました。住んでいる地域が大きく離れているだけで、こんなにも価値観の違いが生じるものなのだと思いました。今回のプログラムで、自主性や主体性を身に付けることができました。

■世界を見て視野を拡げる

宮崎県小林高校２年　二見　佑之輔

私にとって初めてのアメリカであり、初めてのホームステイでした。出発前のオリエンテーションで「日本とアメリカの違いを見つける」という目標を立てました。行ってみると到着した瞬間から日本との違いを数多く見つけることができました。この感想文を書いている今は、100個近く言えることができると思います。ホストファミリーはものすごく親切な方たちで、会う前に心配していた自分が恥ずかしくなるほどでした。もしできれば、出発前の私にこのことを伝えて、アメリカでの後悔を消したいぐらいです。今回のホームステイで、私は決意しました。それは日本から出ることです。アメリカが世界をリードしている理由がよくわかりました。今の日本では絶対に勝てるわけがありません。私は世界を見て自分自身の視野を広げたいと、今回のホームステイで強く思いました。

■アメリカ人から学んだこと

沖縄県座間味中学校２年　糸嶺　来海

アメリカの人達はとても大らかで、みんな笑顔で、面白いことが好きな人達だなと思いました。少しぶつかっただけでも“Excuse me.”と謝ったり、歩いていてすれ違った人と話したりと、日本では経験しないことをたくさんしました。子どもたちには自分の部屋がありましたが、ずっと部屋にいるわけではなく、課題やパソコンをリビングに持ってきてやったり、ずっとリビングにいたりと、孤立することなく多くの時間を家族一緒に過ごしているのが驚きました。私は中学校に入ってから部屋にこもっていることが多く、家族との会話が少ないと思うので、日本に帰ったら、アメリカにいた時のように、リビングにいる時間を増やしてみようと思いました。また、家族の大切さを改めて実感しました。学校の授業を通して、日本では周りの空気を読める子や人に合わせられる子が良い子とされているけど、アメリカでは、自分の意見を発表できたり、積極性がある子が良いという考え方があることを知りました。私自身あらめて積極性のなさを感じました。答えを挙手して発表することを毎日していたけど、私は自信のなさから手を挙げることができませんでした。今後は授業でも積極性を育てるため、たくさん発言したいと思いました。

■自立できたプログラム

大分県玖珠美山高校１年　向井　隆真

私がこのプログラムを終えて言えることは、本当に貴重な体験をさせてもらったということと、また行くべき場所と会うべき家族ができたということ、そして自分自身が一人の人間として自立し成長することができたということです。毎朝ご飯を自分で作って食べ、洗濯物も自分で洗い、自分の荷物も自分で管理することができました。私はこのプログラムを通して自立へ少し近づいたと思います。この経験を今後の生活に活かせるようにしたいです。

■It was a good program

東京都Christian Academy in Japan８年　萱　帝登

I got to make several friends which was very nice and was happy. I sometimes had struggles with them but I still got to solve them. The teachers there were nice and the assistant teacher was also nice. I am also thankful that the church there lent us a room to use during a school time. This was a good program for the kids to improve mentally and the studying part. I enjoyed it.

■積極的に意見を言えるようになった

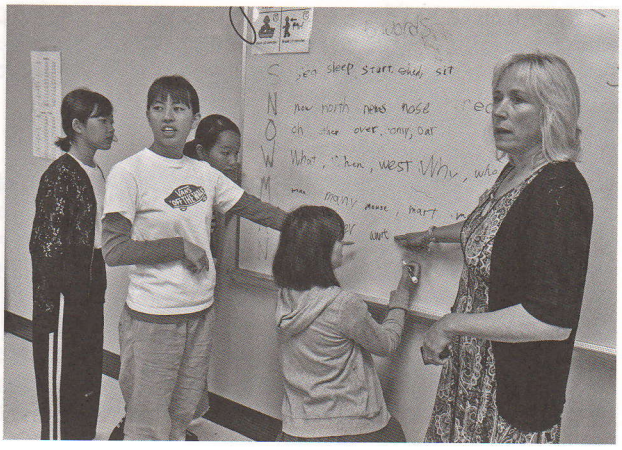
鹿児島県鹿児島第一中学校２年　児嶋　美月

アメリカ出発前に「自己主張の国アメリカで自分の意見を積極的に言えるようになる」という目標を立てた。最初は慣れない英語にとまどい、何も言えずにいたけれど数日たつと言えるようになった。例えば、日本では恥ずかしくて自分から手を挙げることの無かった発表。アメリカではちゃんと自分から言うことができた。周りの人からみれば「自分から発表」なんて当たり前のことかもしれないが、私にとってはとても大きな成長だと思う。英語でアメリカ人とコミュニケーションをとっている時気付いたことがある。それは発音の大事さだ。ほんのちょっとした発音の違いで誤解が生じるので発音も正しく覚えようと思う。

■充実した夏

佐賀県伊万里高校２年　副島　悠太朗

アメリカに着く前は、これから３週間やっていけるか不安しかなかった。アメリカに着いて最初の３日間は軽いホームシックだった。睡眠もうまく取れていない中、全く違う世界に慣れようとして体力的にもきつかったし、夢で日本の友人などが出てきた時は、学校へ行くことが憂鬱で、自分の家で寝ていたいと思うことがよくあった。そんな中、家でパーティーがあって、だんだんアメリカでの生活に余裕ができ、慣れていくことができた。そこからは一日がとても早く感じられ、２週目、３週目はあっという間だった。今思うと、日本で過ごす日々の何倍も充実していて、何倍も楽しかったと思う。このような充実した日々を送ることができたのは、優しく私たちのことを思ってくれるホストファミリーがいてくれたお陰だと思う。４月にホームステイに参加することを決めて、家族や親せき、先生



たちから協力を受けて参加した。その方々にも感謝の気持ちを忘れずに日本に帰りたい。このプログラムと通じて、アメリカについて学び、人々の優しさに沢山触れることができた。思い切って参加を決意してよかったと思う。

■英語は慣れ

長崎県長崎中学校２年　真崎　晴至

英語は勉強したというより慣れだった。家にいる時、映画を見る時、全てが英語だったら、聞いているとだんだん慣れてきて、わからない単語は辞書を引き、何を言っているのかわかるようになっていった。辞書を引かなくても、わからない単語を言って、「○○？」と言うと説明してくれた。何を言っているのかわかった時はとても気持ちが良かった。人々の性格はそれぞれだが、全体的にフレンドリーで、冷たい人には会わなかった。僕もそれにつられて、少しはフレンドリーになった気がする。アメリカ人は知らない人でも友達のように接する。ホストブラザーと歩いている時、道で会った男の人と楽しそうに話し始めて、後から友達か聞いたら、「No. Who is he?」と逆に聞かれた。帰国前夜、ホストブラザーと庭で流れ星を８回ぐらいみた。言葉で表せないぐらい美しかった。そして、アメリカにまた行って、あの星をホストブラザーとながめたい。

■自分の未熟さを痛感

熊本県帯山中学校２年　杉山　誉樹

今回のアーリントンでの滞在で分かったこと、それは自分がまだまだ未熟だということです。「例え学力が良くとも、それをいざ使う時、役立っていないのだとしたら、その学力は本当の学力ではなく、ただのお洒落にすぎないのです。」とある人が述べていました。人は単なる茎にすぎない。地球上で最も弱い植物である。しかし、それは考える茎である。人というものは、考えることでこそ意味があるのです。英語が通じないのならどうすればいいか？きっといくつものルートがあるはずです。そしてそこから最善のルートを選べばいいのです。私もそうでした。自分にうぬぼれ、楽だと思っていた本場のアメリカは、想像を絶する場所でした。知らない単語がどんどん出てきて、頭の思考回路はショート寸前。そこで私が取った行動、それは、わからなくても話の中に入り、自ら話をするというものでした。そこまで行く過程は、難しい人もいれば、楽な人もいるでしょう。しかし、両者にとって同じことは、それが未知の体験ということです。ほとんど経験することのできない体験を無駄にしているということです。今回のホームステイは、未熟な僕をどこか成長させてくれたと感じています。

■3週間で見えた自分の成長

鹿児島県志布志中学校１年　兒玉　斗和

３週間のホームステイが終わった。この３週間で見えた自分の成長と自分の弱いところ。自分を変えるために参加したホームステイ。初日から僕はホームシックになった。日本のことしか考えられなくなった。心の弱さだ。でもそれも経験だ。ホームシックを乗り越えたら僕の心は強くなると思った。それからは一日が過ぎる度にアメリカの生活を楽しめてきた。ホストファミリーは元気で明るい家族だった。家にはビックサイズの犬。心をいやしてくれるし、とてもかわいい。ひとつひとつの体験は宝物だと思っている。この経験をさせてくれた家族、親戚や市役所の方々、そして陰で僕を支えてくれる人たちがいるということを忘れてはいけない。だから感謝の心をいつも心のどこかで持っておきたい。初日は早く帰りたいと思っていたが、今はアメリカを離れたくない。パーティーの最後の歌では涙が止まらなかった。またサクラメントにいつか必ず行く。

■人の親切から学んだこと

宮崎県赤江中学校３年　德留　尭伸

ホストファミリーとの別れは悲しかったけれど、来年の夏に、ホストブラザーが日本へ来る予定だと話していたので、それを楽しみに待つことにします。ホストファミリーとは、いつか一緒に富士山に登る約束もしました。Arlingtonのメンバーと知り合えたことも、自分にとって、このホームステイの中で、とても大きな事でした。今回のホームステイに参加して自分が感じたのは、人に対する親切の大切さです。ArlingtonのメンバーTCのKarenとCori、早紀先生も皆優しく、いつも他人を思いやった行動をしていました。自分が

このホームステイに参加した最初の目的は英語でしたが、この３週間で自分にとって一番大きかった事は、人への親切を多く見たり、受けたりしたことだと思います。これからは自分の人間性を磨いていくという目標もできました。今回のホームステイでは、今まで自分が見てきたものとは全く違ったものも多く見ました。このホームステイに関わってくれた人々への感謝を忘れずに、この経験を今後の生活のいろいろな場面で活かしたいと強く感じました。

■ホームステイに行って気付いたこと

長崎県淵中学校３年　住倉　心

数カ月前はとても楽しみでうきうきしていたホームステイは、甘いものではなかった。飛行機の中では寝れなくて、でも空港から乗ったバスから降りたときにホストファミリーがいたのはおどろいたし、うれしくもあった。中学から習ってきた英語を使ってがんばって話した。最初は３歳のホストシスターが何を言ってるのかさえ分からず、質問に答えることもできなかった。夜は寝ようとしても１時間か２時間後には起きてしまうし、英語は意味わからないし、一気にホームシックになった。何をしてても涙が出てきた。手紙を書いている時はもう号泣。たぶん、この期間で日本に帰りたいと思わなかったことはないと思う。でも終わりが近づくと、日本には帰りたくなくて自分の気持ちがあいまいだった。お母さんの日本料理が食べたくてしょうがなかった時もあった。日本とお母さんが好きだということが考えてみて分かったことだった。お母さんには毎日のように暴言を吐き、迷わくかけているし、嫌だと言うけど、なんだかんだ言って好きなのだという事もわかった。そして、お金がかかるホームステイに行かせてくれたのは本当に感謝している。嫌な事も楽しい事もあった24日間は、私の記憶に様々な形で残ると思う。

■共通の話題で仲良くなれた

鹿児島県池田高校１年　深川　晴天

常に積極的に、そして表情豊かに過ごそうと心に決めていた私は、出来る限り日本人よりアメリカ人と過ごすことに努めました。私の拙い英語を一生懸命聞いてくれた彼らは異国人である私たちに対して寛容でした。僕はホストファミリーの他に３人友人を作ることができました。その中でもオライオンとはレ・ミゼラブルというミュージカルの共通の話題で仲良くなることができました。意外と雑学が役にたつことが多かったです。特にキリスト教に関するものが役に立ちました。自分はプロテスタントの教会に初めて行きましたが、みんなが食べ物を持ち寄る立食パーティーなど、他の人たちと関わる場がたくさんあり、こうやってコミュニティーを形成しているものの中心に宗教が存在しているように感じられました。また自分の英語嫌いもかなり改善した気がします。次にアメリカに行く時には、一人でも困らないように英語を学んでいこうと思いました。

■不安な気持ちはなくなった

沖縄県具志頭小学校５年　伊関　莱喜

よっしゃぁ！待ちに待ったホームステイ。まずは沖縄から東京へ行くと少し不安になってきた。次は東京からロサンゼルスに行くとさらに不安になり、目的地が近づくにつれてだんだん不安になっていく自分。でもロサンゼルスからポートランドへ着くころには、友達にもなれてきたので、だんだん楽しい気持ちもめばえてきた。フ

ァミリーに会った時には、いろいろなことが自分の力でできるかなと思っていましたが、何日かたつとそんな事を心配していた自分がばかみたいでした。アメリカのご飯を食べたり、ホストブラザーと遊んで仲良くなり、近所の人ともしゃべれるようにもなりました。このようにいろいろな体験をすることができたのでよかったです。

■間違いはOK!

沖縄県読谷高校３年　當山　寛龍

自分の英語力のなさを見られたくないという気持ちが心のどこかにあって、授業であんまり発表することができなかったです。そんなある日先生が間違いは全然オッケー、何もしないことが一番だめなんだと、初心の気持ちを教えてくれたので、間違いを恐れず、どんどん発表して、残りの2週間の授業はとても身になったと思いました。私の短所は自分に自信が持てず、消極的になってミスしてしまうことです。しかし、アメリカに来て私は、消極的になってチャレンジしないより、積極的にチャレンジして、それが例え失敗でも新しい何かが見つかるということを学びました。私はこれから進学して、夢実現のために一生懸命勉強しますが、この夏経験してきたことを絶対自分の強みにします。まず沖縄に帰ったら、アメリカで学んできたことから目標を立てていこうと思います。

■アメリカで自分が変われたこと

熊本県宇土高校１年　齋藤　美緒

アメリカに来て自分が変わったことが２つあります。ひとつは、自分で何でもするようになりました。日本にいる時には朝ごはんも昼ごはんも親に作ってもらっていました。でもアメリカでは「朝も昼も自分で作るのだよ。」と言われて毎日自分で作りました。毎日飽きないように、サンドウィッチの中身を変えたり、工夫して作るのはすごく楽しく、全く苦痛ではありませんでした。ふたつめは、自分の意見を言えるようになりました。私は今まで自分の考えを言えても、人前で言うことができずにそれが悩みでした。でもアメリカは自己主張をしないと生きていけない国なので、ホストファミリーに自分の意見を毎日伝えていたら、自然と皆の前で話ができるようになりました。人前に出て意見を言うことに恥ずかしさのないアメリカ人が生き生きしているように見えました。私もこうなりたいと思い、ホストファミリーと話しをする時には「これはどういうこと？」「私はこれが好き。」とどんどん自分を主張するようにしました。以前は、こう言ったらどう思われるだろうか、ああ言われたらどうしようか、という気持ちばかりだったけど、今こうやって勇気を持って話をすることで、こんなにも変われるのだなと思いました。それからはもっと自分をアピールできるようになりたい、人前に出て皆をまとめたりできるようになりたいと思えるようになりました。目標を持たずに来てしまったけど、変わりたいという思いがどこかにあったから、自分が変われたと思います。

■言葉で伝える大切さ

佐賀県武雄青陵中学校３年　沸坂　瑞季

日本人とだけで集まっていたら何の意味もないと言われていたので、出来るだけホストファミリーと話したり、色んなゲームを一緒にするようにしていました。また、アメリカでは何でも口に出して言わなければ、伝わりません。アメリカ人は日本人のように空気を読むということをしないので、言葉で伝えるということを常に意識していました。彼らのリアクションも日本人の３倍くらいはあるかというほどでした。アメリカに来て最初の５日間くらいは、環境の違いからか、日本に帰りたいと思っていて、いつも日本の時間を気にしていました。でも残りが10日間となった頃にはそれまでがうそのように時間が過ぎるのが早く感じられ、帰国が近づくにつれ、帰りたくないと思うようになりました。ファミリーには、Thank You の一言では表せないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。

■人として正しく目標のある人に！

鹿児島県長田中学校２年　重久　友里

私はホームステイが二度目なので、たくさん話して笑顔でいると決めていましたが、実際外国人を目の前にすると、Yes, Noでしか答えられませんでした。ホストファミリーと英語で話をする時に、ジェスチャーで表現すると、ホストマザーに「単語を並べて伝えて」と言われて少し大変でした。でも英語を伝えることは楽しかったです。また、夜に日本の学校の宿題や英語の宿題をやっていると、「10時までには寝てね。」と言われ、日本では11時くらいまで起きていても何も言われないので驚きました。でも10時には寝るように心がけました。そうすると生活のリズムがよくなって朝の目覚めが良かったので、日本でも続けられるように頑張りたいです。私の家族は塾などで家に帰ってくる時間がそれぞれなので、夕食も別々で食べることが多いです。でも誕生パーティーなどでみんなで会話をしながら食べると一人で食べるよりも美味しく感じます。ホストファザーもマザーも朝食と夕食はみんなで食べるのがルールのようで、いいなと思いました。家に帰ったらみんなで食事を取ろうと提案してみようと思いました。またマザーは老人ホームに行って笑顔の少ないお年寄りの所に犬を連れていくというアニマルセラピーというボランティアをしていると聞いて、私もこんなことをしてみたいと思いました。このホームステイに参加して自分の目標とやりたいと思うことがたくさんできてとてもうれしいです。日本にいた時は、勉強だけちゃんとしておけばいいとしか考えていなかったけど、今後は勉強だけではなく、人として正しく、目標のある人になりたいと思うようになりました。

■費用以上のものが得られたホームステイ

福岡県武蔵台高校２年　水口　瑛里

今回のホームステイでは、費用以上のものをたくさん見つけ感じることができた。私とホストシスターはK-Popが好きで、会ってから10分もしないうちにK-Popの話で盛り上がった。それからホストシスターが運転する時には必ずK-Popの音楽をかけて、一緒に歌ったり踊ったりして楽しかった。ファミリーは、緊張していた私に優しく接してくれ、「夜はちゃんと眠れた？」「まだ緊張している？」と心配してくれた。そのお陰で一週目には自分の意見を言えるようになり、自分から「今日は暑くなりそう？」など気軽に声をかけることができるようになった。またこのホームステイに参加した仲間も様々な県からの参加しているから、方言や伝統などについても学べた。

■成長できたホームステイ

東京都明治大学附属明治中学校２年　根本　茉和

アメリカの文化に触れて日本の違いをたくさん感じました。時にはその違いが現地の人達との衝突を招くこともありましたが、毎日気付く文化の違いは面白かったです。一番頑張ったことは、授業中にたくさん発言をしたことです。普段、日本では全く手を挙げないけれど、アメリカでは頑張って手を挙げようと思って毎日ドキドキしながらたくさん手を挙げました。日本の学校でも手を挙げられるように頑張ります。３週間で、少しだけど英語が上達し、メンタルも強くなって自分の中では成長できた気がします。

■目標を達成できた

大分県森中学校３年　佐藤　愛優

私がホームステイで学んだことは「目的を持つ、Give & Takeの精神、そしてTryすること」の３つでした。目的は友達を50人作ることに挑戦しました。人との関わりを持つことを目標にして本当に良かったと思います。毎日の学校では友達とのコミュニケーションがとても大切でした。私はとても苦手でしたが、毎日多くの人と関わることで友達を作ることの大切さを学びました。私にとって「Take」

は、ホストファミリーから食事や部屋を与えてもらい、色んな所につれていってもらうなど数多くのものを与えてもらったと思います。そこで私は「Give」で日本食を２回作ってあげました。鍋で炊いたお米は、日本ではうまくいきましたが、アメリカでは鍋の底を焦がしてしまいました。でもそのことも私にとってはいい経験になったと思います。そして、Try、実際に取り組むこと、やってみること。私にとってのTryは、自分からホストマザーに話しかけることでした。最初は話しかけてもらうのを待っていました。しかし、２日後には自分から話しかけてみようと思い、ガイドブックに載っている英文を思い出して使ってみました。するとマザーが多くの返事を返してくれました。たくさんの英語を使って学べることができて大変嬉しく思います。

■料理を作ることが自立の第一歩

宮崎県都城工業高校２年　堀之内　愛華

アメリカでは、一生のうちに何度も仕事がかわる人が多いそうです。たくさん夢がある私にとって、それは魅力の一つです。午後の活動で行った警察署で、私はPolice officer（警察官）になろうと決めました。職業について学べた良いホームステイでした。私は、「日本の料理を10品ふるまう。」という目標をたてていました。だんごと餃子、味噌汁、卵焼きの４品になってしまい10品の達成はできませんでしたが、アメリカの料理を３週間の３食分しっかりと学べました。この目標は私の料理を学ぶ姿勢の背中をおしてくれました。ランチも３週間自分で作り、自立の小さな一歩になりました。自分に新たな経験をするチャンスをくれた両親と新たな挑戦をさせてくれ、支えてくれた先生方、最後まで自分の子のように愛情をくれたFarlry Familyに心から感謝して、これからの充実した人生を作りあげていきます。

■心を成長させてくれたプログラム

熊本県錦中学校３年　本田　希帆

このホームステイで、英語はもちろんのこと、自己主張することもできるようになりましたが、一番成長できたことは、相手をaccept（受け入れ）& respect（尊重する）ことです。私は二人で滞在しましたが、最初は比べられたら、という心配をしていました。しかし、まずは相手を受け入れ、ここに来たのは人間関係で悩むためじゃないと思った。狭い自分の心をアメリカくらい大きくできた気がする。同じ文化的戦場にいる仲間、萌音がいたからこそ気づいたこと、成功したことがあるので、このホームステイで彼女に会えたことに感謝したい。私は何もかもが中途半端で将来の夢もはっきりしていない。何も特技と言えるものがないけど、「アメリカで働く」ということに関しては努力していこうと決めました。私の名前の由来は「希望を持ち、船の帆を揚げて」という意味なので、自分で決めた道は途中で曲げずに頑張ります。心を成長させてくれた仲間と新しい道を作るきっかけをくれたこのプログラムとホストファミリー、参加させてくれた両親に感謝しています。

■You are a part of our family!

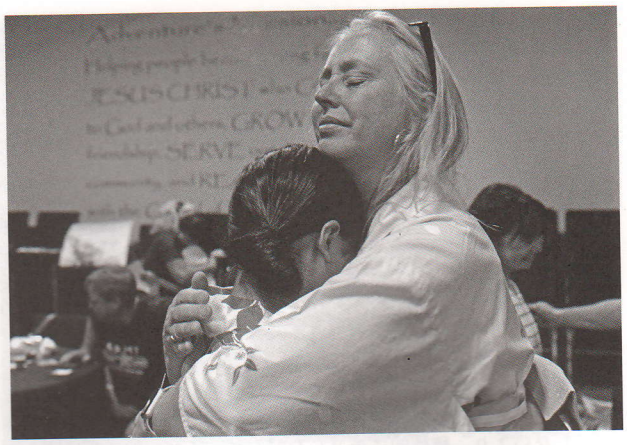
宮崎県宮崎国際大学２年　佐藤　健志郎

この３週間、貴重な経験ができたし、多様な価値観を知ることができた。一番得られたものは、一生大切にしたいと思える仲間と第二の家族と温かく迎え入れてくれる人々の存在である。別れの時、「You are always welcome here. You are a part of our family now, and our door is always open for you to stay if you choose to come back」と言われたことは、決して忘れることのできない言葉となった。 今、心から全てのことに感謝している。全ての人の支えがあったから、このような一生ものの体験ができた。

■自分の将来に響いた言葉

鹿児島県喜界高校２年　中澤　夏蓮

高校２年の夏、私がこのホームステイに参加することに決めたのには一つの大きな理由があります。それは高校生活の半分が過ぎようとしている中、私はまだ進学先を決めていなくて、これからの進路選択に役立てたいと思ったからです。英語に関わる仕事がしたいと考えていますが、具体的には決めていなくて、自分の力を試すことのできる最後のチャンスだと思い参加を決めました。私が一番影響を受けた言葉は、TCのカレン先生の言葉です。最後の授業で将来



の夢についてスピーチをしました。その時に私達に伝えてくれた言葉です。「Hold on to your dream, and do not let anyone talk you out of them or change your mind. Be what you want to be. You will grow older and maybe change your dream and that is OK!」将来について迷っていた私には心に響きました。たくさんの経験、たくさんの人と触れ合ったことで、自分の考え方と同じ所、違う所を見つけ、世界が広がった気がします。平成最後の夏、素敵な町で沢山の新しい友達と最高の時間を過ごすことができました。

■積極的なアメリカ人の生徒

長崎県佐世保西高校１年　橋本　清流

英語を学ぶ時に、アメリカ人の生徒達も来て一緒に学習しました。そこで感じた日本人とアメリカ人との違いは、授業の中で何かを発表する時に、日本人の生徒は手が挙がらないけど、アメリカの生徒は、自分の意見を言いたくてしょうがないといった感じで積極的に手を挙げていて、アメリカ人の先生が日本人の生徒に発表して欲しいからと言って待つという状況が何回かあったことです。アメリカ人の生徒は積極的でいいなと思いました。僕もあんな風になれるよう日本の学校でチャレンジしていきたいと思います。また、老人ホームに行った時に、退職した人たちに質問をして色々なことを教えてもらいました。アメリカの人たちは、生涯の中で色んな仕事をしているんだなと思い、一つのことに縛られていなくていいなと思いました。

■僕がアメリカで学んだこと

佐賀県弘学館中学校２年　具嶋　建士朗

アメリカでの思い出や学んだ事は数え切れないほどあります。まず、言語は唯一のコミュニケーションの手段ではないということです。ホストシスターやブラザーは、スマホの画像を見せて説明してくれたり、自分はジェスチャーをよく使いました。ホストブラザーはサッカーが大好きで、サッカー選手のゴールパフォーマンスを真似してくれて、そのことが一番最初にお互いが笑うきっかけでした。このように、言語以外にもたくさんのコミュニケーションの手段があることを学びました。また、時間を大切にしなければならないということも学びました。今回のホームステイでは特にこのことを実感しました。なぜなら24日間が過ぎるのはあっという間で、お世話になったホストファミリーに何も恩返しができなかったと感じたからです。毎日が充実していました。

■観光旅行とはちがう体験

長崎県島原第一小学校６年　隈部　しいな

このホームステイでは、ふつうの旅行で行ったらこんな充実した毎日は送れていなかっただろうし、これほどまでにたくさんの英語を聞いたり、しゃべったりすることはなかったと思います。有名な所に行くだけではなく、アメリカの異文化を体験したり、ボランティア活動をしたりして、通常できないようなことができたし、英語のクラスでは、歌や手紙の書き方を学べたのでよかったです。心身ともに成長できたと思います。帰ってから学んだことをいかせればと思います。小学校で一番の思い出になると思うし、一生忘れないと思います。

異文化体験報告会の資料から

※原則的に、二つ以上の複数回答を掲載しています。多数と追記されているものは、五つ以上の複数回答を意味します。

■プログラムを通じて何を学んだか。

○ 友達や親の大切さ。(多数)
○ 自分のことは自分でするということ。(多数)
○ 何事にも挑戦する心。(多数)
○ 家族の絆や、家族愛。(多数)
○ 英語のヒアリングがかなりついた。(多数)
○ 人に優しくすること。(多数)
○ 言葉で相手に伝えるということ。(多数)
○ 日本とアメリカの文化の違い、生活の違い。(多数)
○ 言葉は通じなくても、心が通じ合えば大丈夫。(多数)
○ 努力すれば必ず「結果」がでるということ。
○ アメリカの良い所と悪い所、同時に日本の悪い所と良い所。
○ 百聞は一見にしかずということ。
○ 自分が井の中の蛙だったということ。
○ 自分のことは自分でする。
○ 言うべきことは、言わなければならないということ。
○ 自分のためではなく、人のために行動するということ。
○ キリスト教を体験することで、他人を尊重することを学んだ。
○ 何故、英語が必要であるかということ。
○ 自分が今何をすべきかということを学んだ。
○ ルールを守ることの大切さ。
○ ホストファミリーの愛情の深さ。
○ 日本がどれだけ小さいかということ。
○ 愛について学んだ。
○ 人種は違っても同じ人間だということ。
○ 「自分」をしっかりと持たなければいけないということ。
○ 常に感謝の気持ちを持つこと。
○ 自分が笑顔だと相手も気持ちがいいということ。
○ 問題にぶつかった時、立ち向かう勇気。
○ 他人の親切、親の親切を学んだ。
○ 英語が通じることの喜び。
○ 自分の視野の狭さを痛感した。
○ 友達はとっても大切であるということ。
○ 人間の素晴らしさを学んだ。
○ 自然を大切にすること。
○ 簡単にあきらめないという心。
○ 伝える気持があれば、コミュニケーションができるということ。
○ 何事もよく考えて行動すること。
○ 助け合うことの大切さ。
○ 人間、言葉じゃない。
○ 自分で抱いた意志を、他人によって変えない。
○ 信頼したり、信頼してもらえることの大切さ。
○ 何でも許せる心の広さ。
○ 大切なのは、言葉ではなく、思いやること。
○ 自己主張の大切さ。
○ 何でも興味を持つことの大切さ。
○ 英語は勉強ではなく、コミュニケーションの手段であること。
○ 自分の考え方一つで、良くも悪くもなるということ。
○ 意見を持つことの大切さ。
○ 自分で感情をコントロールすること。
○ 隣近所の方々との良好な人間関係のありかた。
○ 自分からしゃべること。
○ 困ったときでも、がんばること。
○ 知識だけではいけないということ。
○ 日本という国に誇りを持つこと。
○ そのとき、そのときを大切に過ごすということ。
○ すべての人が平等であるということ。
○ 英語はできる方がいいが、大事なのは人の中身である。
○ 笑顔の大切さ。
○ 人の話を目を見て聞くこと。
○ 一人一人を大切にする気持ち。
○ 受身であったらいけないということ。
○ 自立とは何かということ。

■プログラムに参加して、自分が変わったこと。

○ 積極的になった。(多数)
○ 明るくなった。(多数)
○ 親や家族、周りの人に感謝するようになった。(多数)
○ いろんなことに対して自信を持てるようになった。(多数)
○ 前向きにものを考えるようになった。(多数)
○ 家事の手伝いをするようになった。(多数)
○ 人前でも、ものおじしないようになった。(多数)
○ 人のことを考えるようになった。(多数)
○ 英語を学習したいと思うようになった。(多数)
○ 他人を思いやる気持ちが出てきた。(多数)
○ ありがとうと言えるようになった。(多数)
○ 何事にも、トライするようになった。(多数)
○ 外国人と話すことに抵抗がなくなった。(多数)
○ 自立できるような気がしている。(多数)
○ 前より大人になった。(多数)
○ よくあいさつをするようになった。(多数)
○ 初対面の人でも親しみを持てるようになった。
○ 授業中の声が大きくなった。
○ 学校で手を挙げるようになった。
○ 自分から人に話しかけたり、自分から行動するようになった。
○ 「みんなのために」と思って頑張るようになった。
○ 新しいこと、初めてのことに度胸がついた。
○ 英語を学ぶ姿勢が変わった。
○ ボランティア活動に興味を持つようになった。
○ 自分が自分らしくいられるようになった。
○ 精神的に強くなった。
○ 自分で食事を作るようになった。
○ いつもニコニコ笑顔になった。
○ 自分の考えを表現できるようになった。
○ 諦めない、強い心を持てるようになった。
○ 「はい」「いいえ」をしっかりと判断できるようになった。
○ 最後までやり通すようになった。
○ 自ら進んで取り組もうとするようになった。
○ 素直になった。
○ 優柔不断でなくなった。
○ 責任感が出てきた。
○ 一人でも行動できるようになった。
○ たくましくなった。
○ 協調性が身についた。
○ 好き嫌いが少なくなった。
○ 恥ずかしがらずに、行動できるようになった。
○ はっきり言うようになった。
○ 何かしら、良い所を見つけられるようになった。
○ 心が広くなった。
○ 自然に笑えるようになった。
○ 自分の人生そのものが変わった。
○ 勉強熱心になった。
○ 友達をたくさん作りたいと思うようになった。
○ 英語の時間が楽しみになった。
○ 両国の価値観の二方向から見ることができるようになった。
○ 自分で考えて行動するようになった。
○ 海外に目が向くようになった。
○ オープンになった。
○ 英語を話すことを恐れなくなった。
○ 顔の表情が豊かになった。
○ 物事を大きく捉えられるようになった。
○ 死ぬほど悩んだりすることがなくなった。
○ 生きていることに感謝するようになった。
○ 愛の意味がわかりかけてきた。
○ コンプレックスがなくなった気がする。
○ わからないことは聞くようになった。
○ 勇気と根性が身についた。

これまでの引率指導者

【あ】
愛甲　利雄　五十市中／1987
愛島　由美　芦花部中／1997
相原　誠一　大東中／1994
赤池　信一　頴娃高／1992
赤﨑　博武　日吉中／2018
赤星　義松　京陵中／1985
赤嶺　成喜　小禄高／1979
明松　伸浩　野尻中／2000
阿久根　崇　大明丘小／2010
朝日　修造　三重中／1989
畦津　清美　四家中／1992
足立　和寛　臼杵北中／2001
足立　盛一　臼杵東中／2006
樗松　伸二　鹿高専／1986
天本　富起子　鳥栖中／2000
天本　由紀子　鳥栖西中／1994
網谷　和顕　熊本工高／1994
新垣　進　石田中／1982
新田　千夏　西指宿中／2016
有嶋　宏一　宮之城高／1998
有馬　健一　出水中／2000
有馬　みゆき　川内南中／2000
有馬　由里香　鹿児島工業高／2010
有村　忠志　蒲生中／2002
飯田　幸一朗　種子実高／2000
井形　多恵子　水俣一中／1996
池田　千尋　末吉中／2017
石神　和彦　加世田高／1987
石川　正二　南大分中／1980
伊敷　幸太郎　長嶺中／1983
石窪　溥布　坊泊中／1984
石田　知子　鶴城中／1991
石原　学　星峯中／1983
出水田　隆文　川薩清修館高／2008
市之瀬　統　城西中／1983
一番ヶ瀬　栄治　南小国中／1998
伊津野　公一　豊野中／2003
伊藤　智恵美　津江中／2007
糸瀬　征夫　長崎南高／1976
稲津　彩子　大在中／2015
稲用　貢　小林中／1990
井上　敬康　本郷中／2015
井上　陽子　鴨池中／1996
井倉　幸比古　東部中／1983
犬塚　正人　喜々津中／2000
井原　道子　鹿児島玉龍中／2012
今市　真智子　重富中／1986
今西　智美　飯野中／2014
今藤　幹夫　鹿児島女高／1980
今別府　幸一　川内東中／1979
今村　みさき　西陵中／1993
伊良波　千春　琉大附属中／2016
井元　智美　東部中／2001
岩井　賢人　玖珠農高／1996
祝迫　勝　鹿児島商高／1976
岩城　清佳　鹿児島西高／1998
岩切　哲男　和田中／1981
岩坂　幸美　細田中／2013
岩﨑　博文　伊万里農高／1999
岩崎　良博　有明西中／1996
岩田　由貴　矢部中／2001
岩野　憲昭　横川中／1994
岩本　紀子　牛深高／1998
上原　敏彦　琉大附属中／1987
植村　美千代　龍北中／1998
上山　重男　谷山中／1975
鶯出　健太　薩摩中／2018
牛島　紀子　飽田中／1989
内　忠雄　高千穂中／1982
内　俊和　妻中／1984
内門　英敏　和田中／1985
内園　富美子　吉野中／1997
内田　繁　武中／1986
内村　美帆　鶴羽小／2007
上井　洋之　清武中／2011
宇和田　克人　永久津中／1984
上床　敦　出水商高／1989
江口　千里　諸富中／2003
江口　夏子　和田小／2018
江田　徳孝　戸山中／1991
衛藤　純一　二岡中／1976
衛藤　美利　大分工高／1994
榎田　猛　北郷中／1996
江向　淳二　龍谷中／2013
恵利　清明　生目中／1980
大内山　東　志布志高／1995
大柿　知之　相良南中／1993
大迫　剛　城西中／2015
大城　清喜　那覇商高／1983
大城　清　中部商高／1983
大城　孝敏　沖縄工高／1986
大城　賢　城北中／1984
大津　秀司　大津高／1991
大塚　寛子　春日小／2011
大槻　寿子　三日月中／1997
大坪　真梨子　広田中／2010
大野　次征　玉名高／1985
大森　一郎　辺土名高／2015
大山　亮子　吉田北中／1995
大山　弥生　港川中／2018
岡元　みひろ　野田女高／1997
小河　早苗　谷山中／2013
小川　三男　鹿児島東高／1979
小川　康　八代農高／2000
小川　馨　生目南中／2016
荻田　万博　東市来中／2014
奥間　正信　真和志高／1988
小崎　和雄　加久藤中／1991
小野　常美　霧島中／1992
小野　恵　鶴谷中／2003
小野原　晴子　出水中／1998
折田　かおり　城西中／2016

【か】
甲斐　菊美　北部中／1998
加口　孝春　城南中／1982
覚前　佳子　肥前中／1999
鹿子木　滝助　山鹿中／1997
加島　盛市　豊見城高／1977
片野田　晴菜　清水中／2016
片山　幸吉　八代四中／1984
桂木　喬　本庄中／1985
加藤　正嗣　福島中／1994
加藤　沙帆　祝吉中／2018
金山　昭俊　東方中／1980
金子　清香　五十市中／1986
兼子　秀紀　岩川高／1992
金子　友里　有明中／2015
金丸　美代　米ノ津中／2010
椛島　陽一郎　武雄中／1997
上三垣　光徳　川内南中／1999
上村　重昭　名柄中／1992
紙屋　貴志　天保山中／1996
唐牛　正一　鹿高専／1980
狩俣　裕樹　久米島西中／2017
仮屋　里司　蒲生高／1990
川崎　裕人　串良商高／1997
川添　大陸　三股中／1981
河野　加奈世　城南中／1999
川野　柳子　出水中／2000
川畑　伸一郎　沖永良部高／1987
川原　美奈子　鹿屋東中／1994
河本　英樹　中部中／2018
観音寺　市夫　山川中／1974
神田　伸司　下入津中／1996
神田　直人　金武小／2015
神部　優美　住吉中／2012
菊池　真寿美　八戸中／1996
菊野　美咲　吉野東中／2005
岸園　久則　国分中／1979
喜瀬　三郎　知念高／1981
北川　政人　山下小／2006
北里　和利　託麻中／1990
許田　泰広　松城中／1983
清水　哲也　志布志中／1989
金武　正市　具志川高／1984
金城　さくら　城北中／2013
崩中　睦美　喜入中／1997
久木原　眞理枝　古田中／2006
楠田　隆　松尾中／1993
工藤　克文　臼杵西中／1991
工藤　正紘　住吉中／1986
國廣　雅子　山の手中／1995
国元　武　岩川高／2001
久原　優子　川登中／2002
久保　貴子　伊敷中／2002
久保田　富雄　糸満高／1984
蔵園　孝一　吉田北中／1991
蔵田　聡英　水俣高／1997
蔵前　勇　笠沙高／1993
栗原　豊子　松橋中／1992
黒木　凱歌男　妻ヶ丘中／1980
黒澤　早百合　錦ヶ丘中／1995
呉屋　広徳　長嶺小／2010
桑原　かおり　鹿屋東中／1999
神尊　美加　南大分中／2004
河野　恵　西始良小／2012
郷之原　充郎　鴨池中／1978
國生　明人　川内高／1996
小齊平　やよい　松山中／2015
小嶋　美和　伊万里中／1996
児玉　康男　鹿大附属中／1976
後藤　輝美　舞鶴高／1997
木庭　良成　玉名工高／1997
小濱　浩香　山之口中／1995
小林　達郎　屋久島高／1988
小林　達道　喜入中／1984
小林　由香　紫原小／2014
小松　聖子　浜玉中／2006
小牟田　明子　徳之島高／1999
是枝　幸明　川辺北中／1982

【さ】
最所　文樹　神埼中／1977
坂口　勝昭　花岡中／1989
坂田　正人　白川中／1975
嵯峨原　昭次　鹿高専／1987
佐久本　操　真和志高／1989
迫田　るみ　蒲生高／2004
佐多　泰将　三ヶ所中／1991
佐藤　敦子　阿蘇農高／1987
佐藤　修　稙田中／1988
佐藤　行治　今津中／2004
実松　奈緒美　思斉中／2005
鮫島　道代　江内中／2011
猿渡　香奈子　伊敷中／1995
澤村　雄二　湯前中／1992
潮平　真由美　寄宮中／2013
紫垣　邦博　真和中／1976
重永　晴子　鹿本商工高／1993
志知島　雅子　須木中／1993
篠原　耕一　阿久根高／1984
柴田　雅弘　南郷中／1989
嶋北　富夫　荒尾四中／1992
下尾崎　正信　伊敷中／1975
下津　康子　垂水高／2003
下津　悟子　西郷中／2016
下京　洋一　伊佐農高／1989
下長野　孝子　鹿児島女高／1990
上下　秀親　芳野中／1989
白川　洋美　黒神中／2005
仁　義美　城西中／1977
末川　信二　熊本水産高／1989
末盛　正和　鹿大附属小／2005
杉崎　良春　王子中／1982
杉山　茂　野尻中／1995
杉山　司　都呂々中／1988
鈴木　俊司　鹿児島大／1983
砂川　浩國　那覇高／1986
角屋敷　順次　古仁屋中／1987
清木場　剛　東市来中／1992
関　重樹　細山田中／1983
瀬頭　真由美　嬉野中／1998
園田　郁郎　岩川高／1984
園田　康夫　大分大附中／1992
園田　恭大　桜山中／1994
曽山　正人　生目中／1998

【た】
大敷　久美子　帖佐中／2013
高倉　シゲ子　祁答院中／1988
高崎　清志　戸町中／2001
高千穂　大観　小国高／1990
高塚　賢司　臼杵高／1991
高野　昭久　明和中／1978
高橋　陽子　穂北中／2012
高山　弘一　天保山中／1988
高山　みずき　福山中／1990
高良　清吉　豊見城中／1981
田川　さおり　阿久根中／1996
竹内　賢二　今津中／1997
竹迫　円　根占中／1990
竹下　恵子　加治木中／1985
竹田　美紀　小国中／1998
武田　陽一郎　川辺高／1986
竹松　陽子　金泉中／2011
武宮　武雄　臼杵東中／1997
田子山　ゆかり　生福小／2012
田島　寛　木原中／1990
田島　廣幸　山鹿中／1987
田島　拓郎　大川内中／1991
立川　研一　東有田中／1990
田中　美和子　鶴翔高／2014
田中　優子　川上小／2013
田中　豊　野田女子高／1994
田中　由美　洗切小／2008
田中　芳伸　大塚中／1989
田中　義啓　鹿児島西高／1991
田邊　慈子　鶴見台中／2016
棚原　隆　伊良波中／1987
谷上　勝盛　八代中／1997
玉寄　善雄　東風平中／1981
溜　真紀子　大川中／1998
多良　伸浩　塩田工高／2000
千原　昭嗣　藤園中／1975
中馬　薫　諸塚中／1999
千代反田　寛　三股中／1988
津嘉山　信行　安岡中／1984
月足　亜由美　鹿高専／1998
月見　芳文　沖永良部高／1995
對馬　恵子　稙田東中／2000
傳　真佐美　谷山北中／2014
土山　末人　帯山中／1977
土谷　倫代　東陽中／2005
筒井　啓太　坂ノ市中／1993
堤　伸弘　城西中／2012
津留　眞由美　大隅中／2017
角田　紘一　鹿本高／1990
常賀　博義　臼杵東中／1989
水流　さとみ　吾平中／1994
鶴田　賢次　人吉第一中／1994
鶴田　俊大　川内南中／2015
寺尾　正　武中／1979
寺岡　悌二　大分大附中／1988
寺床　由紀子　天保山中／2001
寺原　正喜　宮崎日大中／1992
照屋　このみ　嘉数中／2011
照屋　人志　城北中／1985
土肥　晋也　平尾中／1998
桃原　清文　西原東中／2016
堂薗　里枝　鴨池中／2014
當間　實　同済大／2001
遠矢　紗緒里　生福小／2015
徳澄　賢司　水俣高／1991
徳留　健作　鹿屋工高／1994
渡慶次　尚司　城北中／2011
渡慶次　梨紗　与那原中／2016
糖内　正義　津奈木中／1991
友寄　英浩　古蔵中／1979
鳥居　達史　広瀬中／1979

【な】
中尾　明美　情報科高／1992
長尾　秀樹　水上中／1993
中川　寿明　蒲生中／1987
中川　信寿　菱田中／1980
仲里　善助　那覇商高／1981
中島　博子　楠中／1978
中島　真由美　西田小／2013
中島　良介　玉名中／1990
中須　信雄　鴨池中／1974
中田　忍　多良木中／1995
永田　龍一　伊敷中／2001
長東　美穂　啓成中／2004
長野　絵理　佐敷中／1993
長野　晶子　大津産業高／1988
中野　結花里　別女短附高／1987
仲間　弘　宜野座高／1980
仲松　介　嘉数中／2014
長嶺　憲次　豊見城南高／1985
中村　健太　長島中／2013
中村　龍彦　大分東高／1988
中村　敏彦　田原中／1988
中村　正巳　山川中／1979
中村　真美　国分高／2002
中村　幸夫　天草農高／1991
中村　洋一　真和志高／1976
中森　孝一　第一鹿屋中／1987
永山　大祐　財部南中／2007
永山　盛信　北中城高／1987
仲吉　満里　琉大附属中／2012
中渡瀬　要　西陵中／1987
那須　あさ子　真幸中／2015
那須　栄一郎　大宮中／1990
鍋島　義弘　人吉高／1994
成底　正美　豊見城南高／1982
南郷　美幸　伊敷台中／1998
新山　剛　海星中／1990
西　耕治　田上小／2008
西　真喜子　明和中／1992
西　美加　牛深高／2001
西岡　泰伸　天草工高／1992
西倉　弘行　玉城中／1980
西崎　大策　伊敷中／1982
西村　清隆　荒尾高／1988
西元　淳一　宇都中／2008
西山　文雄　本郷中／1985
二宮　たえ　免田中／1996
二宮　恵　吹上中／1979
丹生　長年　上野ヶ丘高／1989
野口　多恵子　加治木中／1974
野下　奈都美　甲南中／2010
野村　久輔　谷山北中／2001

【は】
萩原　久紀　岩脇中／1982
橋口　美紀　鹿高専／1989
橋口　りか　多良木中／1999
橋迫　知章　八幡中／2014
橋爪　誠一　人吉高／1996
畑　康代　帖佐小／2015
波多野　繭　東渓中／2008
八久保　憲彦　福島中／1989
馬場　順子　田之浦中／1997
馬場　秀宣　指宿高／1977
羽生　博　熊本北高／1984
濱田　淳　玖珠町教委／1999
濱田　兼伍　吉田南中／1988
濱元　盛佑　加久藤中／2017
林田　宗雄　熊本工高／1986
原　伸史　鹿屋中／1985
原崎　竜一　菱刈中／1993
原田　彩華　谷山小／2016
原田　勝彦　枕崎中／2007
原田　勝義　米ノ津中／1980
原田　尚孝　泗水中／1987
原田　理恵子　宮之城中／2003
春田　隆　鹿屋中／1978
春山　隆　川辺高／2013
東　一則　大淀中／1977
東　五月　皇徳寺中／1991
東　大輔　東桜島中／1995
東　佑樹　鹿大附属中／2017
東　修平　田検中／2017
東太田　理恵　安富祖中／2018
東畑　理枝　谷山北中／2005
樋口　晶彦　鹿高専／1988
樋口　浩造　熊信愛女中／1977
肥後　雄二　加治木工高／1993
肥田　正和　野田中／1992
日高　修　檍中／1992
日高　和孝　北川中／1987
一松　桂子　第一鹿屋中／2015
姫野　麻由　高松中／2001
日向　煕　大淀中／1975
平岩　洋子　日田林工高／1993
平得　永文　沖尚学高／1987
平田　勝也　鹿児島西高／2006
平田　早紀　宇土鶴城中／2018
平原　幸政　緑丘中／1988
平峰　徳郎　クラーク国際高／2014
平山　香寿美　武中／2016
平山　邦彦　長崎商高／1978
平山　由貴子　甲東中／1996
廣田　明子　大和中／2000
比屋根　すえみ　美里小／2013
比屋根　渚　国頭中／2015
深牧　邦彦　長崎東高／1977
深港　凡夫　加治木高／1985
福岡　夕佳子　江北中／1998
福崎　康代　甲南中／1989
福崎　理美子　伊集院高／2000
福島　尊志　出水工高／1991
福田　賢一　蘇陽中／1991
福田　智行　出水高／2011
福留　光春　出水商高／1981
福冨　俊幸　城南中／1998
福永　準　東桜島中／1999
福原　英明　坂元中／1980
福原　素子　和田中／2005
福元　一夫　加世田中／1981
福山　逸雄　知念高／1985
藤重　吉正　高鍋東中／1983
藤田　知子　平佐西小／2011
藤波　かおり　長洲中／2012
藤原　千帆　城南中／2008
藤本　直美　出水中／1994
淵脇　哲也　平尾中／2002
船倉　文章　緑丘中／1993
富名腰　朝賢　中城中／1986
古川　明彦　唐津五中／1976
古川　昌宏　佐賀西高／1995
別枝　昌仁　伊敷中／1997
星野　謙二　多良木中／1992
堀内　聡子　山鹿中／2000
堀川　祐嘉　天草中／1999
堀切　友弥　鹿児島東高／2002
堀口　不二人　鹿水産高／1988
堀之内　和子　伊敷中／1991
本部　浩　大宮中／1981

【ま】
前川　隆　桜山中／1978
前川　彩乃　上天草高／2017
真栄城　枝理　琉大附属中／2012
前田　英子　国分南小／2002
前田　美香　吉田南中／2014
前之園　純雄　大淀中／1987
前原　千代美　福平中／2011
巻木　美代子　高隈中／2007
牧原　勝志　鹿大附属小／2003
益崎　哲明　大塚中／1981
増田　佑一郎　アミークス中／2014
益満　淳一　甲陵高／1996
真玉橋　昭治　知念高／1985
松尾　浩志　油津中／1978
松岡　真理　重富中／1995
松崎　理恵　滑石中／2007
松田　晃二　多良木中／1994
松田　修平　岩脇中／1991
松原　こずえ　志布志中／2004
松原　宣武　谷山中／1984
松村　緑郎　九州学院中／1978
松元　紗智子　鹿屋東中／2008
松元　弘　明和中／1989
松元　美明　鹿高専／1981
松本　浩二　河浦高／1987
松本　裕　宮崎北中／1976
松本　いづみ　高千穂中／2017
松山　エリ　伊敷中／2012
馬渡　恵　大口南中／2010
丸尾　章　花陵中／1977
丸田　仁　姫島中／2013
御厨　ひろみ　東与賀中／1995
水上　佳子　菊鹿中／1997
水之江　真希　宇佐北部中／2011
水本　賢治　湖東中／1995
水元　重夫　富田中／1986
水元　睦　赤江中／1983
溝田　義弘　吉松中／1993
三田　紀雄　長崎北高／1975
満　洋次郎　吉田南中／2003
満尾　竜一　垂水中／1994
光澤　純也　阿蘇北中／1996
湊　俊一　中山小／2014
南谷　三智恵　鹿中央高／1999
嶺　直子　伊集院高／1995
峯苫　秀幸　武岡台高／2012
蓑田　輝代　京陵中／1993
宮内　隆靖　田上小／2004
宮里　雄之　港川中／1986
宮里　育男　内之浦中／1981
宮路　直子　鹿大附属小／2008
宮西　紀生　鳥栖高／2002
宮之脇　圭　伊敷中／2006
宮之脇　幸男　伊敷中／1986
宮原　映美　切木中／2007
宮原　博文　人吉第二中／1990
宮本　英明　多良木高／1999
宮本　秀樹　青葉小／2010
宮本　理香　神埼清明高／2001
武藤　敦子　帯山中／2005
村上　秀一　球磨工高／1995
室田　都美　田崎中／2008
本山　隆太郎　門川中／1988
森　亜希子　川内中央中／2004
森　匡平　江平小／2010
森　弘一　緑丘中／1979
森　隆　鹿高専／1982
森　忠範　武中／1989
森口　孝子　人吉第二中／1995
森園　博昭　国分中／2000
森田　敏隆　有明東中／1986
森山　日出男　土々呂中／1984

【や】
八ヶ代　俊夫　妻ヶ丘中／1990
屋宜　大仁　糸満中／2017
安留　光一　大島高／2001
八田　大子　三日月中／2014
柳田　昭彦　上市来中／1996
矢野　悦子　雄城台高／1990
矢ノ下　良子　帯山中／1975
山内　雅子　那覇高／1978
山口　直美　崎辺中／2002
山崎　大一郎　大口南中／1998
山下　オリエ　球磨工高／2003
山下　清和　伊敷中／1978
山城　育美　南大東小中／2017
山田　恵子　不知火中／2002
山村　広治　田野中／1988
山本　千加　城西中／2001
幸　克奈　浜脇中／2017
杠　清子　佐賀商高／2004
除川　芳郎　鹿商高／1985
横上　勝行　旭中／1983
横山　朋美　岸良中／2000
横山　博行　球磨農高／1989
吉岡　隆夫　武蔵ヶ丘中／1988
吉岡　恒夫　上野ヶ丘高／1981
吉岡　幸季　長与中／2018
吉坂　実　緑丘中／1990
吉田　弘行　加治木中／1997
吉田　祐一　植木北中／1986
吉永　望　串木野西中／2006
吉野　由香利　南中／2012
吉原　直美　武中／2013
吉牟田　芳延　金峰中／1986
吉村　高三　城南中／1985
吉本　文昭　西指宿中／1988
四元　光也　平尾中／1989
米倉　豊次　高山高／1983
米澤　ともえ　西米良中／1994
米盛　麗美　日当山中／2001

【わ】
若林　一雄　枕崎高／1980
脇　久美子　大口高／2007
脇之園　紀正　鶴丸高／1975
和田　保　都於郡中／1982
渡辺　久美　大分工高／1998
渡辺　恵子　玖珠中／2010
渡辺　繁秋　錦丘中／1976

アカデミックホームステイプログラム参加申込書

会員コード	

太わくの欄は記入しないでください。

県	小	中	高	大	県番号		小	中	高	大	全体番号		担当者名	

※この書類はセンターの管理上の目的だけでなく、引率指導者の指導上の目的のためにも利用されます。

ふりがな		男 女	生年月日	年　月　日 (満　才)	
氏名					
参加コース	□ 小学生コース(15日間) □ 中・高・大学生コース(24日間)	希望発着空港	□ 福岡　□ 熊本　□ 長崎　□ 鹿児島　□ 宮崎 □ 大分　□ 那覇　□ その他 (　　)		
(ふりがな) 現住所	〒(　　)－(　　) 都・道　市 府・県　郡		☎ (　)(　)－(　)		
(ふりがな) 家族の住所	〒(　　)－(　　) 都・道　市 府・県　郡		☎ (　)(　)－(　)		
連絡先	保護者携帯電話： (　)－(　)－(　)		自宅FAX： (　)－(　)－(　)		
	保護者携帯メールアドレス：				
	パソコンメールアドレス：				

※今後、携帯やパソコンのメールアドレスに、プログラムに関する連絡を差し上げる場合がございますので、ご了承ください。

学校名	卒業年月
小学校	年　月
中学校	年　月
高校	年　月

学校名・学年	
学校　年在学中	
担任教師	
英語教師	

写真不要

続柄	氏名	生年月日	職業(会社名及び学校名を具体的に)	コード
父		昭 平		
母		昭 平		
		昭 平		
		昭 平		
		昭 平		
		昭 平		

ステイ地	

正式書類	月　日 渡送	
申込金	月　日 受領	

得意な科目	1.　2.	不得意な科目	1.　2.
趣味		特技	
長所		短所	
持病・既往症	無・有 (　　)	部活動	
英語の成績	5・4・3・2・1	説明会に出席しましたか？	□ はい　□ いいえ　□ その他(　　)
このプログラムを何で知りましたか	1. 新聞・ラジオ　2. ポスター　3. ホームページ　4. 先生(　　)　5. 参加者(　　)　6. 知人(　　)		

過去に参加された方を知っていたらその方の名前を記入してください。	
今回一緒に参加される友人がいたら名前を記入してください。	

申込金	申込金50,000円は □　年　月　日 (　　) 銀行に振り込みました。 □申込書と一緒にセンターに現金書留で送ります。 (注) 送金の場合は「参加者名」にてお振り込みください。

パスポート 有 無	(有効期限　年　月まで)	渡航体験 有 無	(国名　　)

受付

切取線

南日本カルチャーセンター

米国国務省人物交流計画に基づく

米国公立高校交換留学

2020年度　第37期生募集

このプログラムは1961年に米国国務省により定められた「青少年の教育文化交流に関する規定」に基づいて企画され、実施するものであり、米国公立高校への正式な留学制度です。その目的は、日米両国民の友好と親善を深めると同時に、青少年の国際人の育成を目的としております。

留学内容

８月下旬に出発し、アメリカの一般家庭にホームステイしながら、米国高校交換留学生として、約10カ月間米国公立高校に在籍し、異文化交流、相互理解を行いアメリカの高校生と一緒に学習し、単位を取得する。

留学期間　2020年8月下旬～2021年6月中旬

募集人員　20名

留学生参加費用　1,430,000円

出願締切日

第１次募集　出願締切日　2019年５月31日
第２次募集　出願締切日　2019年９月14日
第３次募集　出願締切日　2019年11月16日

※　定員になった時点で締切りますが、定員に達しない場合は、第3次募集締切り後も、個人ベースで出願希望者には対応します。

参加資格

1　出発時、15歳以上18歳以下の高等学校第１学年、第２学年、第３学年に在籍する男女生徒
2　中学１年次以降における学校での５段階評価がいずれも３以上であること
3　心身ともに健全で、異文化理解の習得に熱心であり、交流体験を真に希望する者
4　出発までの事前学習を終了できること
5　オリエンテーションの内容を修了できる者
6　参加者、保護者とも、パンフレットの内容と配布された資料を充分に理解し、センターの指示・決定事項を遵守できること
7　出発までに、ELTiS212以上のスコアを取ること

◎ パンフレットの必要な方は「南日本カルチャーセンター高校留学係」までご連絡ください。

参加者へのアンケート

■留学生のあるべき姿とは、どのようなものだと思いますか？

・何に対しても積極的でなければいけない。
・常に自分の留学の目的を持つべきだ。
・いつもいろんな人に対して感謝の気持ちを持つこと。
・人それぞれにいい所、悪い所もあるから、みんなの事を好きになれるよう努力すること。
・「待つ」のではなく、「自分から」という心構えで友達と接したり、授業を受ける。
・自分の国、文化に誇りを持つこと。
・「留学生だから」という甘えは持たない。
・辛くても投げやりにならない。目の前の問題から逃げない。
・「自由」の意味を勘違いしないこと。なんでも好きなことをしていいのが「自由」ではない。
・落ち込んだっていい、そこから立ち直ればいい。
・小さなことでめげない、強い人間になる。
・相手に求める前に、まず自分自身のことを振り返ってみる。
・自分の行動に責任を持つこと。

■日本と米国の高校における違いは何だと思いますか？

・アメリカの高校は、日本よりもっと先生と生徒の関係が近いが、でもその為に、生徒が先生に対して失礼と思われることもしばしばあった。
・米国の高校は生徒に全ての判断を任せ、個性を伸ばすことに重点を置いている。
・日本人は依頼心が強く子どもっぽいが、米国人は独立心が強く大人である。
・日本人は物知りでも自己主張ができない。アメリカはその逆。
・授業中、先生とのやり取りが多い。何を質問しても、先生は怒らず聞いてくれる。だから授業中寝てる人もいない。
・エッセイやレポートなど、自分の考えをまとめる宿題が多いのがアメリカの高校。
・米国には、積極的な生徒はどんどん進めるシステムがある。

■この留学で得たものは何だと思いますか？

・忍耐力と独立心。
・英語力。
・日米両国の友人の素晴らしい友情。
・生きることの難しさと自己管理の大変さ。
・感謝する心。
・前向きに考えること。
・未来への希望。
・自信。
・自分をコントロールできるようになった。
・笑顔が多くなった。
・達成感。
・人生を楽しいと思える心。

■これから留学を志す生徒さんに先輩としてのアドバイスをお願いします。

・とにかくうるさいぐらい積極的に話すこと。
・あんまり力まないで気楽にね。
・友達作りに１年間気合を入れてください。
・基礎的英語力を身につけておく。
・楽しいことばかりではなく、つらいことの方が多いということを出発前に覚悟しておくこと。
・アメリカに行っても自分たちは日本人なのであり、日本人としての誇りを持つべき。そして日本に帰っても日本人らしく生きる。
・依頼心は一切捨ててください。
・アメリカの映画や音楽を見て聴いておくと、話題にもなるし、アメリカそのものを幅広く理解できる材料の１つです。
・何でも待ってたんじゃあダメ。自分から行くこと。
・辛いけど、それ以上に得られるものがある。
・分からないことは恥ではなく、当然のことだと頭に入れておく。
・自分をしっかり持ち、見失わないこと。そして、自分で道を作ること。

お問い合わせ・お申し込み先

旅行企画・実施 ㈱南日本カルチャーセンター

〒890-0056　鹿児島市下荒田3丁目16番19号

TEL 099-257-4333(代表)　お問い合わせ専用　0120-212122

観光庁長官登録旅行業第1355号　(社)日本旅行業協会正会員

総合旅行業務取扱管理者　平原靖子

ホームページ　http：//www.mncc.jp